ロンダルキアの悪魔王

刺身７９８円

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

稚拙な文章、しょぼい表現、どこかで見たような展開にご都合主義な独自設定。挙げ句に何番煎じかという出がらしな題材……それでも書きたいーーー作者はそう願った。そして出来心で書いてしまったーーー。

あ、ついでですが、粗筋はバズズが生き返り再び三人の英雄と戦うありがちな話です。

目次

1 ―― 1
2 ―― 10
3 ―― 19
4 ―― 29
5 ―― 39
6 ―― 48
7 ―― 55
8 ―― 64
9 ―― 71
終 ―― 81
終裏 ―― 84
もしも編　バズズが呪詛を吐かずに死んだ世界 ―― 87

1

これはロンダルキアの邪教の勢力が敗れ去った後の話。
ロンダルキアを愛し配下を想う一匹の王が、その地を去るまでのつまらない話である。

■■

万年雪に覆われた死の大地、ロンダルキアーーー
世界地図の中央付近に位置する、破壊神シドーを御神体とした邪教の総本山であるハーゴン神殿の存在する呪われた土地。かの地は険しい山々と天然の要塞に囲まれて、人間にとって踏破することは極めて困難な場所に位置していた。
しかし死の大地といえども、どのような環境であっても、そこに適応する生命は存在する。絶え間無く降り積もる氷雪は流れた血を、破壊の爪痕を、看取るもののいない死体を……或は優しく、或は無慈悲に隠して消し去っていく。
そして雪原に佇む一個の生命。
ーーー神官長様（ハーゴン）は敗れたか。
ロンダルキアにただ一つ存在する人為的な建築物、ハーゴン神殿を彼は目を細めて見上げる。吹雪が止むことの稀なロンダルキアではそうしないと雪が目に入るからである。
彼の見上げる荘厳な建築物……ハーゴン神殿の最上階は、大袈裟な言葉や比喩的な表現でなく大破している。まるで巨大な力を持つ何者かが暴れ狂ったかのような、ひどい有様。そしてそこは事実、邪教の神である破壊神シドーと人類の最終兵器とも呼べる三人の死神達が雌雄を決した場所でもあった。もちろんこの死神という表現は、あくまでも彼が帰属する勢力にとっての話である。
破壊神と三人の死神達の戦いはまさしく神話であり、最前線で破壊神を打ち破った男は彼の所持するいなづまの剣という武器の特性も相まって後に雷神と呼ばれるようになる。しかしこれはあくまでも

余談である。
すこしそれてしまった話を元に戻そう。
雪の上に四足歩行で立ちハーゴン神殿を眺めつづける彼、四足歩行で尚優に三メートルを超える体高を誇る巨躯。悪魔を彷彿とさせる凶々しい翼。腹部には横一文字の大きな傷痕が残っている。そして彼は朱がくすんでどす黒くなった強靭な毛並みに覆われている。
彼は一匹の猿怪、名をバズズという。シルバーデビルと呼ばれる悪魔族とその上位種であるデビルロードを統率する悪魔族の長である。
百戦を経たシルバーデビルは、敵の返り血を浴びてその純白無垢な毛並みを紅く朱く染め上げていく。そして元々針金のように強靭なその毛並みは敵の返り血によって尚補強され、やがて彼らは悪魔卿（デビルロード）と呼ばれるようになる。そしてさらにデビルロードの頂点に立つ個体が、バズズと呼ばれる千の戦いを超えた猿怪王、彼である。
彼は先述した三人の死神と相対し、命を落としたーーーはずだった。少なくとも死神達にはそう認識されているはずだ。さもなくば彼らは人類にとって極めて危険度の高いバズズを血眼になって討伐しようと探しているはずだ。ならばなぜ死んだと認識されているはずの彼は生きてここにいるのか？
彼は用心深かった。彼は疑問を感じていた。
彼には二匹の同胞がいた。名をアトラスとベリアルという。同胞と言っても仲が良かったということではない。むしろ逆に犬猿の仲だったと言っていいだろう。ならば何故彼らが同胞なのか？
答はシンプルであり、彼らが三人ともロンダルキアに住まう覇権を争う悪魔族の長だったからである。一角一ツ目巨人（アトラス）と猿怪（バズズ）、そして牛鬼（ベリアル）。彼らは長年ロンダルキアの覇権を競い、しかし今現在直面しているロンダルキアの衰退という危機に悪魔神官の神官長であるハーゴンを神輿として一時的に不可侵協定を結んだ。
ロンダルキアは死の大地と呼ばれている。悪霊の住まう土地。死を苗床としてしか存在できない土地である。なぜロンダルキアが死の大地と呼ばれるのか？
それは、ロンダルキアを維持する死霊（ブリザード）にある。ロンダルキアに住

まう死霊（ブリザード）は人間の凄絶な死を以ってしてしか増殖できない。その理由は至ってシンプルである。

魔物にとっての死とは生存競争による淘汰でしかなく、人間のみが唯一己の死を恨むのである。恨み、憎しみ、やるせなさ、こういった負の感情を抱いて死んだ人間がブリザードとなり、死の体現であるブリザードの存在抜きにはロンダルキアの存続は不可能なのである。

ゆえに彼ら三人の悪魔の長達は己の故郷を守るために一時的に不可侵を結び、結託し、そして敗れ去った。

破壊神シドーが敗れ、これから先はますます人が勢いづく。そうなれば人死にが少なくなり、ロンダルキアが衰亡するのは火を見るより明らかである。

そしてロンダルキアの衰亡は同時に彼ら猿怪族も遠くないうちに滅びることを示唆している。シルバーデビルの白銀の毛並みは雪の保護色であり、彼らの幼体はロンダルキアでなければ容易く命を落とすことだろう。繁殖力も弱い。餌の問題もある。専らロンダルキアの洞窟に棲息するドラゴンを主食にする彼らが他の土地に移ったら、良質な餌を得られず著しく力を落とし、人間には目の敵とされ追い回されるであろうことは想像に難くない。事実ここ数十年、ロンダルキアの勢力は縮小しつづけており、若いシルバーデビルの個体も非常に減少していた。

そして彼の疑問と彼が生きている理由である。

三匹の悪魔族の長は、強大な力を持つ侵略者を前にしても手をとって戦うことができなかった。

知能の低い一角巨人は協力という概念をそもそも理解せず、牛鬼は個の戦闘力に固執して一匹で戦うことにこだわった。彼らの元々の出自も関係しているのだろう。アトラスは巨人族の突然変異、ベリアルは破壊神シドーの側近のエリート悪魔。唯一バズズのみが群れの中から数多の戦いを超えて特別な存在に成り上がったため、バズズだけが群れて戦う優位性、数の利を理解していた。しかし彼一匹が理解しても詮無いことである。

結果として三匹はバラバラに戦い、彼らは敗北した。彼らの纏め役

であったはずの神官長も、破壊神の降臨にこだわり内部の不和を放置した。破壊神さえ降臨すればどうとでもなる、と。そして笑えることに破壊神は神官長と共に三人の死神に敗北した。

次々と踏破され破竹の勢いで周りの魔物を殲滅していく強大な敵。

破壊神を盲信するだけの神官長。目前に敵が迫ってなお理解できない主張を繰り返す同胞。彼の疑問とは、彼らを果たして信用するべきだろうかということ。

バズズはことここに至って大局を俯瞰できない味方を信頼できず、保険を打っていた。

バズズは死神達に敗北してハーゴン神殿の上層より地に墜落する。後に雷神と呼ばれるローレシアの王子の必殺の横薙ぎをその身に受けて。上半身と下半身の泣き別れた彼は、自身が敗北したときのために神官長配下の悪魔神官達に自身の回収と蘇生を指示していた。あらかじめ指定した予定地に墜落した彼は、悪魔神官の蘇生魔法（ザオリク）により蘇る。

バズズはロンダルキアを飽きることなく眺める。

一面を白銀に覆われた大地は彼にとってはいつまで見ていても飽きないほどに愛おしく、幻想的であった。しかし現状を放置すればやがて人間共がこぞって押し寄せ、ロンダルキアは彼らに奪われ蹂躙されてしまうこととなるだろう。

ーーー戦う以外には道はない。

彼はハーゴン神殿の内部へと向かって行った。

■■

【俺が指示していたことはどうなった？】

ハーゴン神殿は塔のような縦長の高層の建物である。今彼らがいるのは最下層。ここより上は戦いの余波で荒れ果てている。

彼は自軍の戦力の確認と先行きの思案を行っていた。

バズズは自身の腹心であるデビルロード、ヴァランと呼ぶ個体に問い掛ける。体高はバズズの三分の二程度しかない。バズズに比べたら圧倒的に若い個体であることは明白である。それでもバズズが目

を掛けていた個体であり、戦力は一族でバズズに次いで高かった。
死神がロンダルキアで暴れ回ったせいでシルバーデビルの個体は著しく数を減らしてしまっていた。若いシルバーデビルが多数死に、さらに元々個体数の少ないデビルロードに至っては、今や両手の指で数えられる程度しかいない。バズズが指揮出来るのはシルバーデビルとデビルロード、さほど数はいない悪魔神官、死霊（ブリザード）である。
【はい。ハーゴン様とシドー様は遺体の損壊が激しく蘇生は不可能です。しかしアトラス様とベリアル様に関して言えば、遺体が綺麗な状態で遺っていたため蘇生可能です。御指示通りに遺体を回収して、腐らないように氷漬けしてあります。】
強力な魔物の遺体は時間が経つと腐った死体やリビングデッドのような魔物とガストのような魔物に変質し、蘇生が不可能となる。ゆえに彼らは手早く回収し、氷漬けにした。
バズズは僅かに幸運だった。破壊神シドーと戦闘を行った死神達は彼らも大きく負傷し、戦闘が終わってそのまま帰還の魔法道具であるキメラの翼で逃げるように己の安息の地へと帰って行った。ゆえに彼らはバズズの死体が消え失せたことに気付かなかった。アトラスとベリアルの遺体が蘇生可能なことも。当然バズズがすでに蘇生していることにも。
バズズは瞑目して思考する。存在する札をいかようにするか？
氷漬けの二匹の同胞、彼らは強大な力を持つ悪魔である。彼らを蘇らせればロンダルキアの勢力の地力は上がるかもしれない。
しかし……かの死神共に対抗するためにただ彼らを蘇らせたとしても、前と同じ轍を踏むだけではなかろうか。今彼らを蘇らせたとしても、結局それぞれ好き勝手にして内部の不和を助長するだけなのでは？そして、今度こそ彼らは決定的に敗北して蘇生することも不可能なほどに遺体を破壊されてしまうだろう。
ゆえに安易な蘇生は行えない。彼らがいればギガンテス、サイクロプス、アークデーモンと言った強力な悪魔も従うだろう。しかし彼らはそれぞれの長に従うだけであって、決してバズズに従うわけではない。

ロンダルキアの戦力は著しく低下し、敵方はあまりにも強力な三人の死神達が健在である。
状況の悪さにバズズは溜息を吐きそうになり、部下の前だと思い出して堪える。
【……ひとまずはしばし休息をとる。】
本来の主が既に存在しないハーゴン神殿の最高権力者は今やバズズである。
バズズはそれだけ告げてハーゴン神殿の玉座に腰掛けて睡眠をとることにした。
■■
バズズ配下のヴァランは同胞を見て回っていた。
敗残兵である彼らは、ひどい有様だといえるだろう。
彼らは一様に落ち込み、絶望し、生きる気力を失っている。断頭台をただ待つだけの罪人のように。
絶対の力を持っていたはずの彼らの長(バズズ)も、彼らの信仰する破壊神(シドー)も敗れたのである。
彼らにとって生きることは戦いであり、互角の敵との戦いにおける死を彼らは決して畏れたりはしない。それは勝てば生き残れるからだ。しかし今回の敵はあまりにも強く、ただ滅んでいくのみだという現実は彼らにとってもとても許容できるものではなかった。
ヴァランは部下達の感情を理解している。彼自身も同じ感情に侵されていたからだ。
蔓延する絶望感、見失った生きる理由、なまじ知能が高いだけに受け入れられない末路(みらい)。
部下を見て回ったヴァランは決意していた。
■■
【バズズ様……。】
静謐を湛えたハーゴン神殿。神殿壊滅からさほど経ていないある夜。バズズはどのような行動を取るべきか選択しあぐねていた。
玉座に座り込むバズズは不意に声を掛けられる。窓から差し込む色は黒。辺りの松明には明かりが燈されている。日は既に沈んでい

た。
彼の目前にはヴァランがいた。ヴァランは意を決したような表情をし、口を開く。
【何用だ？】
【打って出させて下さい！俺が敵を打ち倒してみせます！】
【奴らに勝てるとでも思うのか？】
【必ずや……結果を出してみせます！】
ヴァランは息巻く。しかしその提案は余りにも無謀である。ロンダルキアでたった三人の人間に彼らは壊滅的な被害を被ったのだ。今より遥かに多い兵力で。それを考えれば打って出るという選択はバズズにはあまりにも自棄に思えた。地の利がなく、数に於いても著しく劣った状態での戦いとなることは明白である。
【不可能だ！奴らはお前ごときが勝てるほど甘くない！破壊神すら敗れたのだ！】
【それでも座して死を待つよりはマシなはずです！】
ヴァランは食い下がる。本来ヴァランは短慮なわけではない。そしてバズズは威厳と実力を備えた統率者でもある。しかしそれでもヴァランは反論した。状況があまりにも芳しくない。座して死を待つか玉砕するかの瀬戸際だとそう考えているのであろう。ロンダルキアの決戦において戦場から外されていたという不満もヴァランにはあった。バズズにとっては死の危険が高いその戦いから次の一族の長となるはずの彼を外すことはあまりにも当然であったが。
ヴァランにとって強大な力を持つバズズは長い間尊敬の的であった。しかしバズズは敗北した。致命的に敗北してなお、同族の助けとなるべく黄泉から還ってきた。ならば自分も彼の助けとなりたかった。
バズズは黙して先行きを思考する。
ヴァランは自身の死後のデビルロードの統率者となる予定である。彼を失うことは許容しがたい。
しかし、本当にそうだろうか？
ただ手を拱いていても近々人間はロンダルキアを我が物にせんと

攻め入ってくるのは明白であり、勝者がロンダルキアを手にするのは当然の理である。そして彼らの背後にすでに火の手は廻っている。ならばここで自分が彼の行動を止めることに果たして意味があるのだろうか？ロンダルキアが無くなればデビルロードも遠からず絶滅するだろうに？彼をロンダルキアに留めることで勝利の算段がついているわけでもないのに？ならば彼の言う通り万が一の奇跡にかけるべきなのか？

バズズにはどちらがより理があるのかわからなかった。

シルバーデビル、デビルロードは学習能力が高い。しかしあくまでも魔物の中ではという話である。

彼らは経験により集団で戦闘することの有利さを理解していた。彼らは経験により弱った自分達に人間達が止めを刺しに来るとそう確信していた。彼らは経験により戦いに勝てなければ滅びるのみだと理解していた。

しかし彼らは経験がなかったため、人間はしばしば彼らに理解できない行動を起こすということを理解していなかった。

ヴァランはバズズに比べて若い。ここでバズズが彼の行動を諌めても彼は決して納得しないだろう。最悪の場合、外部に強力な敵を控えた状態で同族同士の争いが勃発する懸念も捨てきれない。致命的な敗北を負ったロンダルキアの手勢の士気に関しても、彼らの王であるバズズに打つ手が無いと知れれば時間と共にさらに低下していく。

そして彼らの周りには死が取り囲んでいる。猶予がどれほどあるかわからない。人間がどう動いてくるか理解していない。次にあの死神達がロンダルキアを訪れたならば、その時は彼らが滅亡する時であろう。そして彼ら魔物の流儀は、弱った獲物は容赦なく狩るということ。ゆえに彼らは間もなく人間共が死神を旗頭にロンダルキアに大挙して攻め入ってくると、そう確信していた。そこには致命的な齟齬が存在していることに彼には気づきようがなかった。

ならば答は決まっていた。

【……好きにしろ。】

バズズはヴァランに相応の数のシルバーデビルとデビルロード、そ

して悪魔神官を貸し与えた。
貸し与えた者達も彼自身もおそらくはもう二度と帰ってくることは無いと知りながら。

2

□□

ローレシアの王、サマルトリアの王、ムーンブルクの女王、この三人は、英雄として民間に広く認識されている。ロンダルキアに存在する邪悪なる意思、世界を絶望へと向かわせるよこしまなる存在を討ち滅ぼした英雄達。彼ら三人は、旅に出る前と帰郷した後に於いて一点、決定的な違いがあった。

精神性？戦闘力？功績？

確かにそれらも旅に出る前と帰郷した後で全くの別物だったのは確かである。

しかし、彼らが最も違ったことは、彼ら自身の立ち位置である。彼らは王子として、または亡国の王女として旅立ち、功績を認められて帰郷して王、そして女王となった。

そして、彼らは武王であり、為政者ではない。彼らはこと戦闘に関しては一家言を持つが、政に関しては全くの門外漢であった。ゆえに彼らは今現在困惑している。

破壊神シドーを討ち滅ぼした彼らはこれから争いの少ない素晴らしい未来が待ち受けていて、ローレシアとサマルトリアで協力して人類をもり上げていくものだとそう思い込んでいた。しかし、それは政を知らない子供の青写真に過ぎなかった。

実際はローレシアとサマルトリアで外交の主導権争いを行っているのが現実である。彼らは政治に疎いために関わらないようにしていたが、やれローレシアはロトの第一王子の血脈だから、やれサマルトリアとムーンブルクは恋仲であり英雄を二人擁しているからと子供の口喧嘩のような理由を口実にして主導権争いを行っているのである。大の大人達が少なくとも三人の王達にとってはどうでもいいような理由で政治の主導権を争う様は彼らをいたく困惑させた。

旧ムーンブルク領の支配権、サマルトリア・ローレシア間のインフラ整備の受注の奪い合い、各地に点在する市街地への税金、デルコンダル王家との今後の関係性、三人の王の世界への貢献に対するそれぞ

れの王国に対する報奨金の分配等など。
しかしそれは、武力を行使しないだけマシな争いであることを三人の王は知らない。
彼らは己の権益に執着したが、後世はいざ知れず今現在においては身内で争うほど相手のことを思いやれないわけでも、仲が悪いわけでもなかったのである。少なくともムーンブルク王国の滅亡に対して、一丸となって立ち上がるくらいには。
三人の王は、そのような権力争いよりもロンダルキアに残る邪教の残党の速やかな始末を優先するべきだと主張していた。彼らはかの大地に根付く生命の力強さと人間に対する脅威を体感し、放置すれば必ず人類にとって弊害になるとそう主張していた。しかし彼らが主張した王達が直接ロンダルキアに赴いて残党を討伐するという最も効率的な提案は決して受け入れられることはなかった。
彼らは仮にも一国の王なのである。戴冠前であればいざ知らず、今となっては王である彼らを最前線に立たせるわけにはいかない。万が一にも彼らが落命すれば、王国の斜陽と新たな騒乱が待ち受けているのは明らかであるから。残党狩りなどという雑務を王に任せるなど王国の恥でしかないから。
そしてロンダルキアという土地そのものが天然の要塞であり、練度の低い兵士を派兵してもすぐに命を落とすだけだという事情もある。
様々な要素はそれぞれ独立していてあまり関係していなかったが(唯一の関係性は、ロンダルキア軍討伐に端を発するということである)、結果としてそのほとんどの要素が彼らをロンダルキアに攻め込むのを躊躇わせていた。
これらの要因がバズズが予想していた彼らの行動と実働の齟齬であり、バズズが全く理解できない人間の行動原理であった。
人間が延々とロンダルキアに攻め入ることを延ばしつづけるということは有り得ない。しかし本来であれば当面は人間側は行動を起こすことはなかった。バズズはそんなことが有り得るとは露ほども思っていなかった。それを理解していればあるいはバズズにも他の手立てを取るという選択肢が存在していたのかもしれない。

しかしそれでもロンダルキアの滅亡は時間の問題ではあったのだが。

■■

ロンダルキア、ハーゴン神殿。

ヴァランが率いる旧ハーゴン軍はすでにロンダルキアを出立していた。

ここには玉座に座るバズズと、彼の前で畏まる先日とはまた違ったデビルロードの個体が存在した。デビルロードの名はメローネ、ヴァラン同様バズズの配下であり、バズズの実子でもある。

【……メローネ。】

【はい。】

【お前に指示を出す。お前はヴァランを見届けて来い。】

【かしこまりました。】

バズズはメローネに指示を出す。

敵地にはかの三人の死神がいて、ヴァランが敗北することは必定である。

バズズは一匹の腹心を失い、相当数の手駒を失うことになる。ならば失うならばそれなりの見返りが必須である。そのために彼に敵勢力の攻略の糸口を託すことにした。

バズズは窓から外を眺める。ロンダルキアの積雪は過去より今までずっと変わらない。彼がまだ幼体であったころから。

人間共がロンダルキアに土足で侵入して来るようになれば、この美しい景色は変わり果ててしまうことになるのであろう。

バズズは過去を思い起こしていた。

■■

バズズがまだ幼い頃、人間はこんなにも広範囲に根強く棲息していたわけではなかった。

彼が幼い頃は、まだ人間は今現在アレフガルドと呼ばれる北西のそれなりの大きさの大陸に相当数棲息していたに過ぎなかった。その外側の人間は、存在するにはしていたがその数は現在より遥かに少数

であったと言えるだろう。それがなぜ今現在ロンダルキアを脅かすような事態に陥っているのか？

その切っ掛けは、アレフガルドに覇を唱えた竜王の敗北である。

バズズは幼い頃を思い起こす。

彼がまだ小さい頃、遠く離れたロンダルキアまでアレフガルドの力を持つ竜の王の勇名は轟いていた。魔物にとって力を誇示することは、人間が権力を誇示することと同等の意味があり、価値があった。ゆえに多くの魔物はアレフガルドという遠い地で力を振りかざす竜王に憧れていたといってもいいだろう。

しかし、あるとき竜王はたった一人の人間に敗北する。あまりにもあっさりと、彼が誇示しつづけた力という土俵で、竜王は言い訳できないほどに敗北を喫した。

竜王に勝利をおさめた人間の勢いは衰えることを知らず、かなりの数の人間達がアレフガルドの外の大地へと飛び出した。彼らはアレフガルドより外の世界にも意欲的に侵略を行ってきた。そして、そこから終わりの無い人間と魔物の争いが始まり、ロンダルキアの斜陽が始まることとなる。

人間は貪欲で、狡猾だった。

彼らは貪欲に勝利を続け、ついには強力な魔物が跋扈するロンダルキアまで攻め入ってきた。幾度となくロンダルキアの勢力と人間は戦いを繰り広げ、押しやられたロンダルキアは徐々に勢力を縮小していく。

唯一の勝利と言ってもいいムーンブルク王国の滅亡も大勢を見れば焼石に水に過ぎず、人間の魔物に対する反感をより大きくしただけであった。挙げ句に詰めの甘い神官長は確実に王家の血筋を断絶させることをせず、辱めるために王女に掛けた犬に変化させる呪いも解かれてしまうことになる。

そして今現在より少し前、敗走を繰り返したロンダルキアの勢力は天然の要塞であるロンダルキアの洞窟を盾にロンダルキア山岳地帯に籠城を行い、破壊神の降臨により逆転を狙わざるを得なくなるまでに追い詰められてしまっていた。

そして何よりも腹立たしいことに、最初に侵略を行い人間共の魔物に対する強烈な反感を煽った竜王一族は、人間との不戦を協定し我関せずとばかりに人間共との不干渉を貫いている。彼の指示のもとに地獄に付き従った配下の魔物の無念の想いを裏切って。

バズズは思考より戻り視線を神殿内にさ迷わせる。

ーーー再びの死神共との決戦は避けられんのだろうな。

獣は追い詰められていた。

■■

ロンダルキアの外を行軍するシルバーデビルとそれを率いるデビルロード、僅かな数の悪魔神官。それは数は多くないが、ロンダルキアの外でそのような光景を見ることは極めて稀である。

シルバーデビル、デビルロードは群れて生活する習性を持ち知能も高いため、指揮を執る能力と命令を遂行する能力が他の魔物よりも長けていた。

ヴァランが部下に出した指示はわかりやすいものであり、比較的数の多いシルバーデビルが火炎魔法（ベギラマ）で襲撃を行い、悪魔神官が蘇生魔法（ザオリク）で倒れた仲間のフォローを行う。そして少数のデビルロードが彼らの攻撃地点の指示を出すというものであった。そして、ヴァラン自身は敵がシルバーデビル達に目を向けている間に、攻め込まれるのを嫌がる弱点に単騎で奇襲を行う。

彼らは自身に帰り道が存在しないことを理解している死兵であり、バズズに残された手勢の中でもこの期に及んで比較的に士気の高い者達であった。

三人の英雄達は気づいていない。

彼らはロンダルキアの悪魔達を追い詰めすぎていたことを。

彼らは最も警戒すべき対象を討ち漏らしていたことを。

ペルポイ、ムーンペタ、ベラヌール、人が身を寄せ合い生活している拠点はローレシア王国とサマルトリア王国を除いても世界中にそれなりの数点在する。しかし、彼らは積極的に魔物に攻められることはさほどに多くはない。

その理由は簡単である。ロンダルキアにとって、侵略者は専らロー

レシア王国とサマルトリア王国、そして今は存在しないムーンブルク王国だけであり、他の土地の人々は例えばテパの村のように自然を利用し水門によって魔物の侵略を防いだり、例えばペルポイのように地下に町を作り魔物の侵略を防いだり、つまりは精力的に魔物の住む土地への進攻を行うわけではない。

つまり、魔物にとって脅威なのはローレシア王国とサマルトリア王国、後は精々海を隔てたデルコンダル王国くらいのものなのである。王国さえ潰せれば、そのほかは後々いかようにもできるのである。

ゆえにヴァラン率いる軍勢は他の地点には目もくれずに王国を目指してロンダルキアを北上する。

□□

「敵襲!!敵襲だあぁぁぁっ!!」

サマルトリア城下町、一人の兵士が悲鳴をあげる。

人々は即座に声を上げた方を確認し、城下町に滞在していた兵士は王城へと報告に向かう。

彼の眼前に立つは人類の力の象徴、三人の英雄が一人、サマルトリア王である。その威様に兵士は方膝を着き頭を垂れる。

「敵の数と詳細は?」

「は、はいっ!!敵はシルバーデビルと悪魔神官です!遠巻きに複数のデビルロードも確認しております!!数はおよそ十程度です。」

彼は即座に部下に指示を出す。

「囲んで戦え。人間側の数の利を生かして包囲殲滅を行え!」

サマルトリア王は思考する。

敵はロンダルキアの上位悪魔。おそらくは敗北した邪教の残党共がやけを起こしてロンダルキアから攻めてきたのだろうと。シルバーデビルは魔法力と速度に特長を持つ強力な敵であるが、生命力に関してはさほどではない。悪魔神官も魔法力が高いが生命力はあまり高くない。ならば敵を包囲して回復を行う悪魔神官を優先的に撃破すれば被害は抑えられるだろう。

彼がそう思考したその時ーーー

「王!別の地点からも複数のシルバーデビルが現れました!」

「なんだと!?」
先ほどとは別の兵士がサマルトリア王へと報告を上げる。
「戦局はどうなっている?」
「はい!今現在襲撃が行われている地点は別々の四地点です!敵はその……引き気味に戦い兵士との戦闘を避け民間を害して回っています。包囲しようにも地点を頻繁に移動するため難しい状況です。ローレシアに対する援軍要請はいかが致しましょうか?」
「いらん。時間がかかりすぎる。俺が出る。お前は俺が城を空けると客人として滞在しているムーンブルク女王へ言伝を行え!」
「はっ!!」
サマルトリア王。三人の英雄の中でも業師(トリックスター)と呼ばれ味方の補助や戦闘における繋ぎ役に長じた英雄。彼の到着は味方に絶対の安心感をもたらす。彼は愛剣であるはやぶさの剣を持ち、まほうのよろいとちからのたて、ふしぎなぼうしを装着して戦場へと向かう。
しかし、彼の内心は疑問に満ちていた。
ーーー奴らは俺達を憎んでいるはずだが、引き気味に戦っている?まさか敵がなんらかの作戦を練っている?いずれにせよ厄介だ。敵が突っ込んで来るだけであれば数で押し潰せばよいのだが、敵に逃げに徹されてしまえば城に勤める兵士では素の身体能力差で撃破が困難になる。やはり俺が戦うしかないか?
気になることはあるものの、今までのハーゴン軍は力押しの戦いしか仕掛けて来なかった。結局は彼はロンダルキアの上位悪魔に対して兵や民間の損耗を抑えるために自身が前線に立つという結論を出す。
■■
サマルトリア城下町に攻め入る部下達をヴァランは遠くより眺めていた。
シルバーデビルはベギラマで町を焼き払い、悪魔神官はイオナズンで爆撃を行う。デビルロードは襲撃地点の指示を出し、敵方の兵が集まって来たら速やかに退避を行う。あらかじめ彼が部下に出した指示通りに彼らは動いていた。

【そろそろか。】
【もう行くんですか？】
【……ああ。もし首尾良く生き残ることができる奴がいるようなら後は任せる。】
メローネもサマルトリア城下町を眺める。
今でこそシルバーデビル達は上手く役をこなしているが、彼らはじきに兵士に囲まれて一匹、また一匹と落ちて行くことになるだろう。サマルトリア城より死神が出陣したとの部下のデビルロードの報告も受けていた。体力が尽きて足が止まったときが彼らの最期である。
【……誰も生き残れませんよ。】
メローネは小声で呟く。
ヴァランは羽を上手く使い見る見るうちにメローネの元を遠く離れて行く。彼は城の外壁に取り付き、サマルトリア城の外壁を鍛えられた体幹で容易に上っていく。
□□
「階下に逃げてください！敵が城内に忍び込んで来ています！」
ここはサマルトリア王城二階のとある一室。ムーンブルク女王はサマルトリア城内に邪悪な魔力が侵入したことを敏感に感じ取り、サマルトリア前王の元へと向かい進言した。
今感じ取れる強大な魔力はサマルトリア城の屋上に存在する。屋上を合わせて三階建てで横に広いサマルトリア城ゆえに彼女は王侯貴族へと階下に逃げるようにと進言する。
本来であれば王族と平民を同一の逃げ場に逃がすべきではないが、王城内に強大な敵が突如現れた有事である。
「どういうことだ？」
サマルトリア前王は困惑する。
仮にもここは王城であり、城下に相当数の兵とサマルトリア王を向かわせても、それなりに質の高い兵士がそこそこ数を揃えているはずだった。王城内が危機に陥ることなど考えづらい。
しかし彼に進言をした相手はただの人間ではない。三人の英雄の一人である。ただの世迷い言と片付けるにはあまりにも発言者の威

光が大きい。
「いえ……これは……。おそらく、敵はロンダルキアの上位悪魔です。」
ロンダルキアの上位悪魔、サマルトリア王城へと侵入した敵がただのそれであれば城の兵士であってもどうにか対処は可能だっただろう。しかし、今向かって来ている敵は以前戦った猿怪王（バズズ）に非常によく似た、そして猿怪王に迫らんかというほどの強大な魔力を纏っている。ムーンブルク女王が警戒するのも至極当然であった。
「し、しかしただの上位悪魔であれば城の兵士でも対応が可能なはず……。」
「いえ、おそらく敵はただの上位悪魔ではありません。その中でも極めて魔力の大きい敵が向かって来ています。私が出ましょう。」
「し、しかし客人に戦わせるわけには……。」
「……いえ、サマルトリア王が城下に出払っている今現在、この敵に対抗できる人間は私しかいません。」
「く……ならば絶対に怪我をせずに戻ってきて下さい。貴女が怪我をなさったら、私は私の息子に対しても、サマルトリアの客人である貴女に対しても、面目が立ちません。」
「おまかせください。無事に戻ってきます。」
ムーンブルク女王は手にいかずちのつえを携え、みずのはごろも、ふしぎなぼうしを身に纏い強大な力を発する敵の元へと向かう。

3

□□

「フンッー・ハァッッ!!」

味方に防御魔法（スクルト）をかけ敵の放つベギラマを自身の撃ち出すベギラマで相殺させる。後方より迫る悪魔神官の爆裂魔法（イオナズン）をはやぶさの剣から放つ衝撃波で遠くで爆発させ、背後で援護を行う悪魔神官達を睡眠魔法（ラリホー）で眠らせていく。

端的に言って、前衛も熟せる上に味方のフォローの上手いサマルトリア王の率いる軍勢は敵を圧倒していた。

サマルトリア王のはやぶさの剣が翻り、シルバーデビルの羽を切り落とす。彼の手より放たれたベギラマが悪魔神官を襲い、シルバーデビルは悪魔神官を抱えて散り散りに撤退する。彼は逃げたシルバーデビルの一匹に狙いを搾り、後を追い一匹ずつ確実に絶命させる。

一匹を犠牲に逃げきった他の魔物達は別の部隊と合流し、再度兵士の薄い場所を攻め立てる。

しかし実際はサマルトリア城下町の臣民の多くは既に王城内に緊急避難が済んでおり、これ以上城下で暴れても建物の被害しか出ない。

サマルトリア王が戦場で敵と相対したときに感じたことは、やはりおかしい、というものであった。

数え切れない程の魔物と戦い、数多の戦場を経た彼を以ってして、彼が戦っているシルバーデビルの集団の違和感はすでに無視できないほどに膨れ上がっている。

彼がかつてロンダルキアに攻め入ったときの魔物の行動は、思うが儘に暴れ回り、生物を蹂躙するというものであり、今彼の目の前に存在する敵襲団は明らかに何らかの目的を持って行動をとっている。

敵は引き気味に戦っておりこちら側の味方の損耗はさほどではないが、逃げる敵は打ち倒しにくいことこの上ない。

シルバーデビル達は明確な指示を受けて行動している。

野生の動物でも魔物でも、彼らは我が子や卵を育てているときは巣

に迫る外敵に対して異常なまでに警戒を行う。ロンダルキア軍に於いてもハーゴン神殿には総大将の神官長ハーゴンが控えて破壊神シドーの祭壇が奉られている。

大切なものは後ろに追いやって何が何でも守ろうとする。バズズは今までの経験から生物のこの本能を理解し、大切なものは城の中に隠していると推測して部下であるヴァランに攻める箇所の具体的な指示を出していた。彼が思考した最も効率がよいであろう戦いかたと合わせて。

バズズが思考の末編み出した戦い方は、いわゆる囮戦術であった。

サマルトリア王は敵の首魁の悪辣さをまだ知らない。

■■

【彼らは……その……よかったのでしょうか？】

ハーゴン神殿の玉座の間、たった一匹この地に残ったデビルロードであるシモンは遠慮がちにバズズへと問い掛ける。

彼の問いの内容は明白であった。

ヴァランにバズズが貸し与えた兵力は、残されたロンダルキアのシルバーデビルのおよそ半数、七匹しか残っていなかったデビルロードのうち観察役のメローネを含めて六匹、悪魔神官に関してはさほどの数ではないものの、ロンダルキアに残されていた彼の動かせる兵数を考えれば破格過ぎると言える数の魔物を投入していた。

【……致し方ない。】

対するバズズの返答は非常に簡素なものであった。

バズズは、部下の多くの気持ちを、怯えを明確に感じ取っていた。

彼の部下達は、多くが怯え、自身の未来に恐怖し、敵の異常な迄の強さに畏れを抱いていた。

自分達の未来は無為な死なのではなかろうか？と。

今回の彼らの進軍は本来であれば死への恐怖に怯えた暴発といっていいだろう。そして彼の部下のヴァランはそれを敏感に感じ取り、部下の恐怖を殺意と士気に転化させ、部下の死に意味を持たせることを誓って進軍を行った。

彼らを放置すれば内部に恐怖は伝播し、意見が分裂し、恐慌を来し

て戦うことすらままならずに敗北していた可能性が高かった。
そして進軍したとしても、彼らが何の結果も残せずただ無意味に死んだとなればいやが応でも士気が駄々下がり、結果として敵が攻めて来たときにどうにもならなくなる。
酔わないと生きていけないのだ。勝利という幻想に。勝てるという幻に。敗残兵が恐怖に抗がうためには、時には酒の力も必要なように。
それがために、バズズは腹心を使い捨て、何らかの結果を残すためにそれなりの兵力を預けざるをえなかった。
そしてそれは元を辿れば、彼らロンダルキア軍が人類に致命的な敗北を喫したことに端を発する。
バズズは一縷の望みをかけてヴァランに軍勢を預けた。
彼にできることはメローネの帰還と報告を待つことのみであった。
□□
サマルトリアの城内を走る水色のドレスを纏った麗しい令嬢、彼女の実態は三人の英雄と謳われるうちの一人、ムーンブルク女王である。
すでにサマルトリア兵士と上位悪魔の戦いは始まっている。階上では爆音が鳴り響き、加速度的にサマルトリア兵士の生命力が消えていくのをムーンブルク女王は感じ取っていた。
彼女はひたすら走り階上へと向かう階段を上る。戦場へと邁進する。
それがその実は死に至る悪手だということに気付かずに。
しかし、仮にそのことに気付いていたとしても彼女は消え行く生命を救うために屋上へと向かったであろう。彼女が人類の英雄であるがために。英雄には英雄の弱点が存在するのである。
そして彼女は、屋上へと至る堅牢な扉のかんぬきに手をかける。
■■
屋上で暴れ回り配備されていた兵士を尽く片付けたヴァラン、彼の足元にはつい先ほど迄動いていた兵士達が事切れている。屋上に配備されていた兵士は寡兵だった。他の大勢の兵士達は王侯貴族の身

を守らんとして退避した王族に付き従っている。
ヴァランは屋上の堅牢な鉄製の扉を見て、後に城の屋上より僅かな間街中の戦闘の様子を確認する。
ーーーやはり、バズズ様の御指摘通りこいつらはこの巨大な城の扉の中に大切なものを隠している。こいつらは俺が扉を開かないように扉の前に陣取っていた。……外のシルバーデビル達はもうさほど時間稼ぎはできないだろう。しかしすでに俺達に退路は存在しない。失った仲間達の命の分何らかの見返りを手にしなければならない。
屋外のシルバーデビル達はあるいは兵の槍に致命傷を受け、あるいは死神と相対し、あるいは体力が尽きて徐々に墜ちはじめていた。
ヴァランは鉄の扉を再び視界に入れる。
ーーーやはりこの扉をなんとかして破壊するほかあるまいか。
ヴァランはため息をつく。
時間がかかり分の悪い行為になるがそれでもどうにか扉を破壊するほかないと扉に向かう。
彼は……幸運だった。
彼が扉に呪文を撃ち込もうとした刹那……扉が内側から何者かによって開け放たれる。
□□
扉を開け放ったムーンブルク女王は、目前のヴァランの巨体と朱に染まった屋上の床を見てほんの僅かに硬直する。彼女は本来ならば後衛であり、敵を目前にする機会がほとんど無かったことが災いしたと言えよう。しかし彼女は即座に精神を立て直し、眼前のデビルロードに意識を向ける。
そして、ここで互いの意識の差異がムーンブルク女王の虚を突くことになる。
ヴァランはバズズより明確な指示を受け、王城に匿う何か、つまり王侯貴族と臣民の大量虐殺を勝利条件に置いている。対してムーンブルク女王はこれまでの魔物の行動の経験により敵が自身に向かい攻めて来ると判断している。

ムーンブルク女王は戦闘を意識し構え、対してヴァランは戦闘力の高いムーンブルク女王を無視して速度を出して城内へと特攻する。
ヴァランはほくそ笑む。彼は建物の内部から強力な力を秘めた英雄が出てきたために、さらに内部に弱点が存在しているという確信を深めていた。強力な駒を配置してでも護るべきものが内部に存在する、と。
そしてさらなる遅延。
ムーンブルク女王は城に匿う臣民達を守るために急いで悪魔の後を追いかける必要があった。しかし、屋上で血の海に沈む兵士達の幾人かは手当をすぐに行えば助かるのではないかと、そう迷いを持ってしまっていた。
ほんの僅かに思考した末、彼女は結局屋上に倒れ臥す兵士達を見捨て、急いでデビルロードの背中を追いかけることとなる。
「はあっっ!!」
杖の先で収束する魔力、彼女は前を走るデビルロードの背中に向けて爆裂呪文（イオナズン）を放つ。臣民達の命を脅かされている今の状況では城内の被害について考えている余裕はない。しかし回避に専念したデビルロードは身軽で素早く、無尽に壁を蹴り軽々とイオナズンを躱してどんどん彼女にとって嫌な方へと進んでいく。
そうして走りつづける彼はやがて終点へと辿り着く。そこは一階の大広間からこれまた堅牢な扉一枚を隔てた廊下である。大広間は有事の際の避難場所として指定されており、内側より鍵をかけることが可能となっていた。扉の向こうが彼の目的地点であるが、さすがに多くの臣民の命を護る最後の扉だけあって容易く壊すことは不可能であろう。
ーーー戦うしかあるまいか。
ヴァランは自身の背後を追って来る英雄と対峙する覚悟を決める。
□□
サマルトリア王の勘は最大限の警報を鳴らしていた。とにかく良くないことが起こっている、と。
街中を襲撃した悪魔の群れは、その数を半分に減らしても一向に撤

退する様相をみせない。彼らは仲間が地に墜ちても毛ほどの動揺もみせない。

彼は部下に指示を出す。

「俺は一旦城に戻る。後の戦いは任せる。」

すでに悪魔達はその数を半分以下に減らし、疲労困憊している。遠巻きにしているデビルロードに関しても、囲めば多少の犠牲が出るだろうが殲滅は可能であろう。

彼は後の戦闘を部下に任せ、城へと向かって行く。

□■

サマルトリア城内の一階の大広間前の廊下、ここでは今二つの強力な個体による苛烈な戦闘が行われていた。

片方はデビルロードの特に戦力が高い個体、もう片方は三人の英雄達のなかでも呪文による火力に特化した後衛の女王。

幅およそ四メートル、高さがおよそ五メートルの廊下で彼らは戦闘を繰り広げていた。

壁を蹴り、羽を使い滑空をしながら襲い来るデビルロード。しかし女王は自身が耐久に劣ることを理解していたため、敵の攻撃を避ける技術を磨いていた。相手の直線的な攻撃を見切り、彼女は身を躱す。いくら後衛といえどもある程度以上の体術技能がなければ彼女がかの過酷な冒険に着いていくことは不可能だったであろう。

【ベギラマ!!】

ヴァランは火球を撃ちだし、女王は火球をみずのはごろもで受けてその場で回転、火球を打ち消した。

炎が効果の薄いことを理解したヴァランは甘い息を女王へと吹きかける。しかし女王はイオナズンを付近の壁に放ち、甘い息を爆風で周囲へと拡散させる。

「はあああっ!!」

女王が手にするいかずちのつえの先端に魔力が集中し、光球が撃ち出される。女王はイオナズンを唱え、間一髪で避けたヴァランの背後の壁に巨大なクレーターが出来上がる。

ヴァランは避けたイオナズンの爆風に乗って女王に接近し爪を突

き立てようとするも、女王は手に持ついかずちのつえを掲げ、壁に背を預け、ヴァランの攻撃は防がれる。
女王のいかずちのつえよりほとばしる雷撃がヴァランの羽を焦がす。
戦況は端的に言って、時間と共にヴァランにとって著しく悪いものとなっていく。
体の大きな彼にとって狭い廊下での戦いは非常に難しく、彼の得手とする速度に乗った三次元の戦闘が難しいために少しずつ、しかし確実に戦いの天秤は女王へと傾いて行く。しかし実はそれはさほどの問題ではない。耐久の低いムーンブルク女王はヴァランの近接の一撃さえ受けてしまえば戦況は容易にひっくり返る。
今は専ら後衛である彼女に対して至近距離で戦闘を仕掛けているために戦えているが、真に問題なのは時間が経てば近接戦闘も可能な二人目の死神が敵の援軍に到着することである。そうなればヴァランの敗北は必至である。ゆえにヴァランは焦っていた。
しかし、彼は知らない。そして女王は目前の戦闘に集中している。
彼は幸運で、必死さは時に道を切り拓く。危機と好機は紙一重。
サマルトリア城の構造上、サマルトリア王がムーンブルク女王の援軍に来るためには眼前の堅牢な扉を開かなければならない。
ヴァランは魔法の撃ち合いよりも格闘戦の方が分があることを理解し、女王の側で爪を振り回す。鞭の様にしなやかな彼の腕は、音を切って女王へと襲撃する。
「マヌーサ!!」
敵が格闘戦に移行しようとしたことを理解して、女王は幻覚魔法（マヌーサ）を唱える。周囲に女王の幻が現れたヴァランは舌打ちする。
ーーー厄介な奴だ。
格闘戦を行うことが苦しくなった彼は、天井へと貼り付き下方一面に向かって火炎の息を放射する。
ーーーちっ！やはりあまり効果が大きくなさそうだ。
みずのはごろもを纏う女王に火炎攻撃はほとんど効果を為さない。当たるか運任せで格闘を行うか天井に貼り付きながら思案するヴァ

ランへと女王のイオナズンが飛んで来る。天井を蹴ってヴァランは退避する。
サマルトリア城は激しい戦闘の余波で揺れつづけている。
□□
サマルトリア王は急いで城へと向かっていた。
彼が城に向かう決断をした直後、王族付きの護衛兵士により王城に強力な悪魔が現れたという報告を彼は受けていた。
ーーーやはり街中に現れた魔物達は囮だったということか。
ハーゴンが率いていた時には有り得なかった行動に、彼は敵の背後の新たな首領を思索する。
ーーーまさかハーゴンを超える敵が現れたのか？一体どこから？ロンダルキアの悪魔達には痛手を与えたはずなのだが？
疑問を抱えながらも彼は女王の援軍に向かうために大急ぎで王城へと向かう。
□■
女王と悪魔の戦闘は、新たなる局面を迎えていた。
火炎攻撃の効果が薄く、呪文合戦で敵方に軍配の上がる状況。なおかつ視界は幻に包まれている。挙げ句に時間が経つほどに敵方に援軍が現れる可能性が高くなる甚だ不利な状況。そんな状況でヴァランが新たにとった戦術は、自身の被弾を度外視して聴覚頼みで破れかぶれの格闘戦を行うというものであった。
そして、その選択は女王にとって最も効果的で嫌な戦術だった。
「うっ。」
当てずっぽうで振り回されたヴァランの腕をいかずちのつえで女王は防ぐ。しかし膂力に劣る彼女は壁際まで吹き飛ばされる。
呪文の被弾を覚悟して最高速で最短距離を突っ切るヴァランに対し、女王は呪文を練り上げるために集中する僅かな時間すら持てない。そして武技の理を外れ力任せで当てずっぽうに振り回される腕は、予測がつき辛く彼女にとって非常に捌きにくいものであった。
己の役割を果たすべく必死であり、至近で腕を振り回しながら行動を阻害する甘い息を吐いてくるヴァランは女王にとって、非常に戦い

辛い敵であった。
何より脅威なのは、自身のダメージを度外視している点である。
例え一時的に距離をとってイオナズンを放つことが可能であっても、敵は痛手を無視して突っ込んで来ることは明白であり、女王には無理に相手を打ち倒さずともサマルトリア王の援軍を待つという選択肢が存在したことも災いした。
そして、決定的に彼我の明暗を分けるその時が来てしまう。
「■■■！大丈夫か！助けに来たぞ！」
サマルトリア王の仲間を心配する声が廊下に響く。彼はすでに兵士より扉の向こうでムーンブルク女王とデビルロードが戦闘を行っているという情報を得ていた。
内側からサマルトリア王が手をかけ、大広間への扉は徐々に開かれていく。開くはずのなかった扉の鉄が軋む音にヴァランが嗤う。
ムーンブルク女王はヴァランの邪悪な笑みにとてつもない悪寒を感じ取る。
「だめ!!こっちに来ては…扉を開けてはだめ!!」
ムーンブルク女王は必死で声を上げる。
ヴァランは壁を蹴り、天井を走り、開け放たれた扉へと向かう。彼はサマルトリア王の意表を突き、最高速で彼の頭上を走り、人々の群れの中へと飛び込んだ。

ーーーメガンテ!!
ヴァランの魔力と生命力が暴走し、当たり一面に何人分か分からない血肉が飛び散る。
轟音を立て、悲鳴が上がり、戦闘の余波で幾度も揺さぶられ破滅の自爆に晒されたサマルトリア城の天井が崩落する。
「あっ、あっ……あああああ
唯一少しだけ離れた地点にいたムーンブルク女王はそれを客観的

に見ていた。
彼女は絶望を感じている。

これが仮に人間同士の争いであれば、落としどころや倫理的にやるべきではない行為が存在したはずだった。不幸なことは、これが人間とどうしようもなく追い詰められた魔物の手段を選ばない生存競争であったことだろう。
しかし、その行為がハーゴン神殿に乗り込んで数多の魔物を虐殺した英雄達の行為と、果たして如何程の違いがあっただろうか？
世界を揺るがす大事件、後にこの日のことを人々は《サマルトリアの落日》と呼ぶようになる。

4

□□

一匹の上位悪魔が王城内部に侵入して避難指定場所にて自爆、城の一階の天井部が崩落しその余波は城全体に伝播する。あたかもドミノ倒しのように王城は崩壊していき、瓦礫は王城内部に向かって降り注ぎ、結果として王城内部に避難していたサマルトリア王国民のおよそ七割弱が死傷。未曾有の大惨劇となった。死傷者に身分や立場の関連性は無く、かつては権勢を誇っていたサマルトリア前王も瓦礫に巻き込まれて死亡した。また、城内には人類の最高戦力である三人の英雄のうちのサマルトリア王、ムーンブルク女王らが存在し、サマルトリア王は自爆に巻き込まれて酷い怪我を負っていた。なお事件の主犯である魔物の軍勢は戦闘の末全員死亡した。これを記した私に関してもーーー（これ以上は字がにじんでぼやけていて解読不能）

《サマルトリアの落日を記したある男の手記より、一部抜粋》

サマルトリア王国壊滅。生き残った国民達は近隣でありサマルトリア王国と深い親交を持つローレシア王国へと避難した。

ローレシア王と王国民、ムーンブルク女王は精力的に国民の移民を行い、爆発に巻き込まれて意識不明のサマルトリア王はローレシア王国に運ばれた。

ローレシア城では緊急警戒令が発令され、彼らは亡くなったサマルトリア王国民の喪に服すことも後回しにせざるを得なかった。

■■

【バズズ様。】

ハーゴン神殿内部、メローネは玉座に腰掛けるバズズに頭を垂れる。

ヴァランの最期を見届けたメローネはハーゴン神殿に帰還し、バズズに報告を行っていた。

【報告を聞こう。】

【はっ。ヴァランは手勢を率いて、御指示通りにサマルトリア城へと侵攻いたしました。】

【……それでどうなった？】
【はい。作戦成功です。サマルトリア城を壊滅せしめました。敵の士気は下がっています。】
メローネの報告に玉座の周囲の配下より歓声が上がる。
英雄達がローレシアの地を旅立ってから敗戦続きであったロンダルキア軍に入る、久々の戦勝の報告であった。
【そうか。】
しかしバズズの顔は浮かない。
たとえここでただ一つ劇的な勝ち星を拾ったところで、容易に状況は好転しない。さらに言ってしまえば彼に残された手勢の内の半数の戦力を費やしたのだから、戦果を挙げて貰わなければ困る。しかし戦果を挙げられる可能性は決して高くなかったのだから、彼の腹心は非常にいい働きをしたと言えるであろう。
それでも、やがて死神が立ち上がりロンダルキアを滅ぼしにやってくるだろう。自身が信頼している最大の腹心を失い、残された手勢でどうにかしなければ滅亡が待つのみである。
バズズはせっかく上がった士気に水を差すのは愚策だと理解し、よくやった、と一言残してハーゴン神殿の上階へと向かう。

■■

ハーゴン神殿二階、そこはかつての戦いにより荒れ果て、瓦礫が散乱し壁が崩れていた。
崩れた壁から外を眺めるデビルロードが一匹。バズズの配下にたった二匹残されたデビルロードの片割れ、シモンである。シモンはバズズの命により、ロンダルキアの監視を任されていた。
【いかがなさいましたか？】
頭を垂れて問い掛けるシモンにバズズは僅かに思考した後に返答する。
【ロンダルキア洞窟の入口の監視を任せたい。】
【ロンダルキア洞窟の入口ですか？それはまた一体どういう理由でしょうか？】
デビルロードは知能が高く、経験したことを貪欲に学習していく。

バズズはサマルトリア城侵攻について思考していた。
敵方の人類戦力には三人の英雄達が存在する。ヴァランに与えた兵力程度では、真正面から戦えばとても勝利は覚束ないであろうことを理解していた。しかし、ヴァランは成し遂げた。
バズズは今回の勝利の経験により奇襲と早期の情報の優位性を理解していた。もしも敵が今回の奇襲を早い時点で知っていたとしたら、とても奇襲は成功しなかっただろう、と。逆に考えれば、こちらが使った手段を敵が使わないとも限らない。そもそもたった三人の英雄によるハーゴン神殿襲来は、厳選された戦力による奇襲ともいえるものであった。
早期に情報を得れば戦局を優位に進めることが可能であり、そうでなければ不利な戦いとなる。人類の世界ではあまりにも当たり前の話ではあるが、人間は誰も獣が突然情報の重要さを理解するなどと夢にも考えていない。
バズズは、情報を制するものは戦局を制するとそう解釈していた。
【……俺の指示が聞けんのか？】
【たっ、大変失礼を致しました！】
シモンは慌てて頭を下げる。バズズは背を向けて階下へと下りて行く。
シモンは、バズズが変化したことを敏感に理解していた。以前の彼より思慮深く、我慢強く、彼と接する際の威圧感を強大に感じていた。
もともと大きなその背中がシモンにとってとてつもなくに巨大に思えていた。
一度死を味わい、追い詰められた獣は進化する。
□□
サマルトリア壊滅を受けて今現在、ローレシア王城では緊急会議が行われていた。
会議の出席者は、ローレシア王、ローレシア前王、ローレシア王国の首脳部、ローレシア兵士長、ムーンブルク女王、サマルトリア王国で僅かに残った首脳部である。
本来であればサマルトリア王も参加して然るべき会議であったが、

彼は意識は取り戻したものの体は未だに重体であったために省かれていた。
もちろん、議題の内容はサマルトリア王国壊滅で起こったことである。
「なるほど、つまり今回の襲撃は破れかぶれなロンダルキアの残党の暴発などではなく、高い知能を持つ何者かの悪意による侵攻だったと言うことか。」
囮を使い計画的に王城を崩壊せしめた敵、ムーンブルク女王より話を聞かされたローレシア王はそう判断する。
しかし、今回の侵攻の本質はロンダルキアの残党の暴発である。破れかぶれのバズズの、必死に振り絞った知恵がたまたま功を奏したに過ぎない。そして、バズズは知恵を振り絞ることの価値に気がついてしまった。
会議は続く。
「ある程度の期間は、ローレシア王国がサマルトリア王国民の生活を保証しましょう。しかし、会議の重要な議点はそこではありません。」
「敵の正体と対処法ですね。」
「今回のサマルトリア壊滅事件を受けて、ローレシア王国民にも不安が広がっています。速やかに何らかの手を打たねばなりますまい。」
「実際に襲撃現場にいらっしゃったムーンブルク女王は何か気付いた点がございませんか?」
会議は進み、ムーンブルク女王は発言を迫られる。ムーンブルク女王は先の惨劇を鮮明に脳裏に浮かべるが、気丈にも表情を変えず冷静に発言する。
「そうですね。皆様にも先にお伝えした通り、今回のサマルトリアへの襲撃者はロンダルキアに棲息する上位悪魔種です。私から言えることは、ロンダルキアに何らかの手がかりがあるということ。そして、敵の背後には強力な影響力を持つ魔物が存在する確率が極めて高いということでしょうか。」

「ふむ、そうですな。」
「と、なるとロンダルキアに兵を動かす必要がありますな。」
「待ってください、ロンダルキアに兵を向かわせるのはあまりにも危険ではありませんか？」
ムーンブルク女王が控え目に己の意見を議場にあげる。
実際に戦いの現場に居合わせた当事者の彼女の脳裏には、かの作戦を立案した未だ見ぬ敵が、強大な相手として投影されていた。
「しかし、他に手立てはないでしょう。敵の情報もないまま放っておけば、次はいつローレシア城が攻められるかわかりませんぞ？国民の不安の解消をせねばならないでしょう。」
結局理詰めにされたムーンブルク女王は、自身の漠然とした不安を押しやり納得せざるを得なかった。
そのまま会議はある地点までは速やかに進んでいた。そしておおよその方針は決まっていく。
しかしとある問題点で躓くことになる。
「ふむ、となりますと誰をロンダルキアに向かわせるかということですな。」
これが最大の問題である。
ロンダルキアの天然の要塞と跋扈する強力な魔物達の前には、生半可な兵を送ったとしてもすぐに命を落とすことは明らかである。
ならば三人の英雄を送り出せばいいのか？これは本末転倒である。
サマルトリア王国への襲撃は、サマルトリア王国民の虐殺を目的としたものであった。ゆえに三人の英雄を送り出せば、国民は彼らがいない間に国が襲われるのではとより不安が増す。そして実際にそうなってしまえば目も当てられないことになるだろうことは想像に容易い。サマルトリア王国が襲撃されたばかりの時期で、ローレシア王国民は酷く怯えていた。
兵士の練度の高いデルコンダルに応援を打診をしたとしても、自国の英雄達に頼めと突っぱねられるだけであろう。誰も好き好んで命を落とす危険の恐ろしく高いロンダルキアに派兵などしたくはない。
英雄達を分断させて別々の役割を持たせるのは最悪である。相手

の戦力も分からないのに戦力を分散して、仮に英雄が帰ってきませんでしたとかなったらもう何がやりたいのか分からない行動といえるだろう。
ローレシア王はその辺りの状況を理解して、苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべる。
「それでは私がロンダルキアへと向かいましょう。」
一人の壮年の男性が手を挙げる。
彼の名はアルメイダ。ローレシア城に詰める兵士長である。
金髪で体格がよく、それなりの実力を持っている。ローレシアにおいて、ローレシア王の次に戦える実力者である。
しかし、なぜ彼を誰も推さなかったのか？
ローレシア王に次ぐ実力者といっても、彼とローレシア王の間には、マリアナ海溝のように深い実力の差が存在する。具体的に言えば、ローレシア王が単体で易々と討伐できる相手ーーー例えばシルバーデビルでも彼は仲間と連携を取り、それなりの人数、少なくとも十人以上で囲まないと討伐ができないであろう。
生半可な者をロンダルキアに送っても死ぬ。結局ローレシア王国のローレシア王以外の人間は、全員生半可の範疇に入ってしまうのである。
しかし、彼の他に適任がいないのも事実である。もともと指名はしないが会議に参加する大方の人間は彼しかいないことを理解していた。しかし、任務のあまりの危険度の高さに、善良な彼にお前が死にに行けとは誰も言いたくなかったのである。
そうなると必然と会議は彼に任せる他はないという雰囲気になっていく。
「それではアルメイダ兵士長に任務を任せよう。今度の任務はロンダルキアに赴き、敵の背後の存在を探り出すことである。情報を得たら、決して交戦を行ってはいけない。即座にキメラの翼で逃げ帰って来ること。命を落とす可能性の高い、極めて危険な任務となる。」
「はっ!!」
ロンダルキアの洞窟の存在を考えれば、どれだけ上手くことが進ん

でも兵のうち半数以上は命を落とすことが必然である。ローレシア王は部下に死にに行けと指示を出すことに苦い想いをする。
王は兵士長に練度のなるべく高いそれなりの数の兵士と食糧と必要な荷を与える。
兵士長は王に敬礼を捧げると、兵を集めてローレシア城を出立する。
□□
兵士長の道中はある程度割愛しよう。
彼の道中は決して楽だということはなかったが、概ね順調に進んでいく。
サマルトリア壊滅事件の調査を行う彼らに行く先々の街は概ね協力的で、特に死人や大きな怪我人を出すこともなくロンダルキアの洞窟に到着する。
■■
【バズズ様、人間共の一団がロンダルキアの洞窟に侵攻してきました。】
【死神共はいたか？】
【いえ、確認できませんでした。いないものと思われます。】
【そうか。】
【……奴らに襲撃をなさらないので？】
□□
ロンダルキアの洞窟は、はっきり言ってしまえば地獄だった。
落とし穴だらけの階層、どれだけ意識しても間違える方角、キラーマシンやオークキング、サイクロプスといった強力な魔物。雪山に近いため気温は低く、魔物と出くわしてしまえば勝っても逃げても多数の人間が命を落としてしまう。
さまざまな悪辣な罠や次々と命を落とす仲間達に心をえぐられながらも、アルメイダ兵士長は必死に仲間を鼓舞しながら洞窟を進んでいく。
アルメイダ兵士長は今年で三十五歳になる。
十五の頃からローレシア城に使える彼は、ローレシア王がまだ赤子

だった頃から彼と王国に仕えてきた。兵士長が初めて王城に登城したときは、王子が誕生して間もない時期だったことを彼は今でもよく覚えている。幼い王子を幾度となく王城で見かけたし、話をする機会もあった。勉強が嫌いで外で遊ぶ王子を微笑ましく感じたし、兵士の詰め所にやってきては剣術を乞う王子に苦笑いしながらも稽古に付き合った思い出もある。そういえばムーンブルク王国の滅亡に対して旅に出されたまだ若い王子に、彼は酷く心を痛めたものだ。彼は当時の王に、王子の旅の付き人として自分も付いていきたいと必死で上申し、あえなく却下されたことも覚えている。そして年月を経て、王子は事を成し遂げ立派に成長して帰ってきた。王子の戴冠式の時は思わず泣いてしまい、歳をとったことを嫌でも自覚させられた。

彼はローレシア王国を愛し、ローレシア王を敬愛していた。ローレシアは彼の全てだったと言えるだろう。

「兵士長！ドラゴンの群れです！」

「退避だ！散れ！４班が囮となれ！指示した地点に三十分後迄に集合しろ！少しでも遅れたら死んだものとして置いていく！」

「兵士長！２班の人員が落とし穴に墜落しました！」

「２班の代わりに３班が落とし穴の察知を行え！２班の残された人員は他の班に回るようにお前が割り振りを行え！」

「兵士長！キラーマシンです！」

「戦闘を行う！１班と３班の人員で囲んで槍の距離で戦え！魔法を使えるものは距離をおいて仲間の援護と回復に専念しろ！もし他の魔物も同時に現れるようだったら即座に退避を行う！かかれぇ!!」

ロンダルキアの洞窟はどうしようもなく難関で、それでも彼らは士気を保ち必死に進みつづけた。

そしてやがて長い長い洞窟にも終わりが来る。彼らが洞窟の出口に到達したときに、その人数は当初の３００人強から４０を切るまでに数を減らしていた。

「やった！ようやく到着したぞ！」

決して任務が終わったわけではなく、むしろ今からが本番であった。しかし、ロンダルキアの洞窟のあまりの踏破難易度に喜びの声を

上げる部下を彼は諌めることが出来なかった。

□□

洞窟を抜けた先は一面の銀世界であった。彼らにとってロンダルキアの雪景色は目に痛く、美しいというよりは寒々しい、あるいは物寂しい。この日は珍しく、ロンダルキアが吹雪かずに晴れている日であった。

彼らは運んできた荷物より防寒具を取りだし、装着する。

「それでは先へ進むぞ！」

兵士長は声を上げ、組み直した隊列に従い先へ進もうとした時ーーー彼の全身をとてつもない悪寒が襲った。

■■

【……奴らに襲撃をなさらないので？】

【洞窟で大々的な襲撃を行えば逃亡者を出してしまう。放置すればどうせ奴らは洞窟内で勝手に次々に命を落とす。奴らが洞窟を抜けて安心したところを、根絶やしにする。そうすればわずかであれロンダルキアに死霊（ブリザード）が増えるだろう。】

□□

兵士長は悪寒に従い即座にキメラの翼を使うことだけが、彼が生きながらえる術であった。

しかし、何も成果を上げていない状況でそのような判断をとることなどできるわけがない。部下もたくさん命を落とした。このまま帰ってしまえば彼は何のために部下の命を犠牲にここまで進んできたのか分からない。

雪の下から次々と青白い炎のような生命体が湧き出て来る。兵士長は知らないが、それはブリザードと呼ばれる極めて危険な魔物である。もっともロンダルキアには危険でない魔物は存在しないのだが。彼らはどんどん数を増し、兵士達のあるものは困惑し、あるものは恐れ、あるものは身構える。

いつの間にか生命体は彼らを囲んでいた。誰一人逃さぬように洞窟の入口に立つデビルロードのシモンが右腕を掲げ、それが合図であった。

ーーーザラキ、ザラキ、ザラキ……ザラキ！

雪原の大地に無数の死呪（ザラキ）が飛び交い、ローレシアの一団は全滅した。

5

□□

ローレシア先遣隊がベラヌールでの目撃情報を最後に消息を絶った。

彼らは何らかの成果を得ても、そうでなくとも、一定の期間を以ってローレシア城にキメラの翼で帰還して報告する決まり事を定めていた。しかし、その期間を過ぎてもなんら音沙汰がなかった。

現実の行軍において、ある程度の部隊の損耗を以ってして全滅と定義される。たとえ仮に部隊が全滅したとしても、情報を伝えるために戦わずに帰還する人間や逃亡する人間等の生存者が存在するのは現実でもこの世界においても変わらない。

今回の先遣隊は強行軍を目的としたもので、通例の行軍より圧倒的に部隊の損耗率が高いであろうことは暗黙の了解であった。

しかし、消息を絶ち一切の情報が上がって来ないのは異常事態である。ましてや彼らには十分な数の帰還手段（キメラの翼）を与えていたはずである。異常事態調査のためにロンダルキアの洞窟に人員を送るのは、二次被害を誘発する悪手である。

敵がサマルトリア王国を壊滅させたという事実からローレシア王国は十分な警戒を行い、敵戦力を探るための先遣隊を送ったつもりだった。しかし、ローレシアは選択を間違えたのかも知れない。

過ちは悔やんでも悔やみきれず、どうやっても時間は戻らない。陳腐で使い古された言葉だとしてもどうしようもなく真理である。

大切な部下が何の手がかりも得られず一人も帰らなかったことに、ローレシア王は酷く心を痛めていた。

ローレシア王国はことここに至って事態の深刻さを甘く見ていたと痛感させられることとなった。

そして事態を受けて、再度緊急会議が開かれることになる。

□□

「彼らはキメラの翼が使用できない閉所で全滅した可能性が高いのではないか？ロンダルキアの洞窟が危険なのは周知の事実であろう

？」
真っ先にその意見が議場に上げられる。
ロンダルキアの洞窟の危険性とキメラの翼を使用不可な地理を考えれば、至極当然の結論である。
「……決め付けるのは危険だ。それに送り出した部隊には僅かだが脱出呪文（リレミト）が使える術者もいたはずだ。ロンダルキアの洞窟で全滅したとは限らない。それに敵の王は間違いなく強大な影響力を持っている相手だ。どれだけ警戒したとしてもしたりることはない。」
「ええ。サマルトリア襲撃の際の敵の統率のとれた動きと目的遂行のための非情で効率的な行動を考えれば、敵が何らかの策を練り上げ彼らを消息不明に追いやった可能性は決して否定できません。」
サマルトリア王国でのシルバーデビルの統率のとれた行動を間近で見ていたサマルトリア王は、ムーンブルク女王同様未だ見えざる敵を恐ろしく警戒していた。
重体を負って寝込んでいた彼だが、要人であり人類の最高戦力の一人でもあったため彼は最優先で日夜問わず回復魔法をかけられつづけていた。本人の生命力の強さも相まって結果としてすでに、日常生活を問題なく行える程度まで回復していた。彼の頬には自爆に巻き込まれた際の傷痕が赤く深く残っている。
「なるほど。英雄のお二方が口を揃えてそうおっしゃるのであれば、敵は極めて恐ろしい相手だという可能性が高いのでしょう。ローレシア王はいかがお考えになられますか？」
「私も二人と同じ意見だ。」
ローレシア王は簡潔に自身の見解を述べる。
ローレシア王は少し息を吸い、続けて発言を行う。
「こうなってしまってはやはり我々三人が再びロンダルキアへ赴く他はないだろう。」
サマルトリア王とムーンブルク女王も頷く。
彼らは前もって三人で話し合い、既に意見を統一していた。
場に重苦しい沈黙が漂い、一人の老いた男性が発言する。
「やはりそうするしかなかろうな。恥を偲んでお願いしよう。今一

度ロンダルキアに見えざる敵の討伐に向かって欲しい。王が不在の間は、不肖だがわしが一時復権して代理を勤めるしかあるまい。」
ローレシア前王の発言である。
彼も武王の血筋で勇猛な戦士だったが、現ローレシア王ほどの隔絶した強さは持ち合わせておらず、しかも最盛期はとうの昔に過ぎていた。そもそも平均寿命が四十前後のこの世界に於いては、行方の知れないアルメイダ兵士長も老兵の部類に入るであろう。
ローレシア前王はすでに世の平均寿命を過ぎていた。
「国を離れるのは心苦しくあるが、臣民には今一度の忍耐をしてもらう他にない。」
魔物の脅威に晒された世で、ようやく敵方の首領を打ち倒し安寧を得たはずの矢先である。安寧の根拠であるローレシア王が国を空けることは、臣民をいたく怯えさせることになるだろう。ましてやサマルトリア王国壊滅の直後である。ローレシア王はそのことに忸怩たる思いを抱いていた。
「致し方あるまい。老骨なれど国のためにいざとなったら必死で戦うから安心するがよい。」
彼らには前王のその言葉を信じる外に取りうる手だてはなかった。

■■

ハーゴン神殿の奥まって日の当たらない部屋で、バズズは床に安置された二つの氷像を眺めていた。
一つは、十メートルを超える巨体を持ち、横には巨大なこん棒、赤い皮膚をした一角一ツ目巨人、アトラスの氷像。
もう一つは、七メートル前後の巨体、謎の金属で作られた三叉の槍を携えた毒々しい黄色い皮膚をした牛鬼、ベリアルの氷像。
バズズは、三人の死神達との決戦が近いことを予感していた。今までの戦いでどれだけ配下を失おうと、死神達との戦いに比べればどうやっても前哨戦の域を出ない。そして床で凍らされた彼らは来る決戦での重要な駒である。
たとえ床に横たわる彼らがどれだけ嫌いだろうと、仲間割れの危険を侵そうと、彼らの助力無しには僅かな勝利の可能性も存在し得ない

ことをバズズは理解していた。
バズズは彼らの氷像を見ながら思考を巡らせて行く。
ーーー決戦の地はロンダルキア。敵戦力を鑑みれば地の利があり戦い慣れたこの地以外での決戦にはほんのわずかにも勝機が見えない。この地で戦い、こいつらの力を使い、十全に策を練って初めて活路が開かれる。一度敗北した弱者である俺は、思考可能なあらゆる手段を取らない限りは、勝利は決して存在しない！

□□

ローレシア王国の緊急会議は結論を出す。
有事に対し最前線に立つのはやはり、三人の英雄達。戦闘力の極めて高い三人の英雄達を出立させての暗殺戦術である。
英雄達の出立の日時は、怪我を負って本調子ではないサマルトリア王が全快し次第という結論が出されていた。
「……いい国だな。」
サマルトリア王が薄く笑いポツリと呟く。ローレシア城下町は唐突の凶事ゆえに活気こそなかったが、田畑や街道は整備され、整然とした町並みは、きっとのどかでとてもよいものだったのであろう。
彼らは出立前の僅かな猶予期間である今、ローレシア城下町を見回っていた。
国を失った彼の独白に、ローレシア王は彼の心中を慮り、ムーンブルク女王はかつて自身の身に降りかかった凶事を思い起こしていた。
「なあ、何で戦いが終わらないんだろうな？」
サマルトリア王は呟く。
今回の凶事に際して彼ら三人は一部の国民より、戦いは終わったはずではなかったのかという非難を浴びていた。彼らはその事実に心を痛めていたが、もともと国内での彼らへの支持は高く、魔物に頻繁に襲撃される時勢でもあったという事情もあり実際はさほどの大声ではなかった。それでも。
自分達の詰めの甘さが招いた事態なのではないだろうかーーー
三人の心にはとげが刺さっていた。

■■

【決まっているだろう！生きることが戦いだからだ！戦って勝たなければ生き残れない！三人の死神達を葬ることでしか我等の未来は拓かれない！】
奇しくもサマルトリア王の疑問に、遠いロンダルキアのハーゴン神殿内で彼らの怨敵が答えていた。
決戦が近いことを予感していたバズズは、かつてと比べれば著しく数を減らした配下達を集めて決起集会を行っていた。
【お前達の命は俺のもので、お前達は俺が死ねといったら喜んで死ね！代わりに俺はお前達を勝たせてやる！仲間のために！ロンダルキアの未来のために！死力を振り絞れぇぇ!!!】
強大な力を持つバズズの咆哮に、ハーゴン神殿内は異様な熱気に包まれる。
とうの昔に退路のないことを理解していたバズズの狂気は、彼の部下達に次々に伝染していく。
彼我の士気の差は一目瞭然であった。
□□
「それでは、国のことをお願いします。」
ローレシア王は彼の父親である前王に頭を下げる。
ついに彼らが出立する日時が訪れていた。
「これ、現王がたとえわしが相手でも頭を下げるもんではないぞ。」
前王が明るく笑う。
人懐っこく笑う彼の笑顔に、ローレシア王は気を使われてしまったことに気づいて、内心で感謝をする。
「サマルトリア王もムーンブルク女王も頼みましたぞ。わしらは待つことしかできんが、おぬし達が帰ってきたら王国を共に盛り上げて行こうではないか。」
「ええ、もちろんです。」
「叔父上様、その時を楽しみにしていますわ。」
ムーンブルク女王はローレシア前王とは相当に血筋を遡らなければ血縁が存在しないが、ローレシア前王をそう呼んでいた。
ローレシア前王はサマルトリア王の気持ちを推し量り、あえて亡国

であるサマルトリア王国のことには今まで一切触れなかった。シビアな言い方をすれば、最前線に立つ彼に壊滅した自国を思いだし落ち込まれてしまうわけにはいかない。

「それでは行ってまいります。」

ローレシア王はいなづまのけんを携え、ロトのよろいを纏い、ロトのかぶとを被り、ロトのたてを装着する。

サマルトリア王ははやぶさのけんを携え、まほうのよろいを纏い、ふしぎなぼうしを被り、ちからのたてを装着する。

ムーンブルク女王はいかずちのつえを携え、みずのはごろもを纏い、ふしぎなぼうしを被る。

準備を済ませた三人は、たくさんの国民に囲まれて再び旅だった。

既に一度ハーゴンを打倒するために世界を回っていた彼らの行軍は、非常に迅速であった。

■■

ーーーこの時がついに来た!!

シモンは身を震わせる。

ロンダルキアの洞窟の入口を監視していたバズズ配下のデビルロードーーーシモンは、三人の英雄達がロンダルキアの洞窟へと侵入しようとするところを目視していた。

ーーー気付かれている!!

距離を置いて山岳部から監視しているにも関わらず、彼らのうちの一人、ローレシア王とシモンは目があったと直感した。シモンは見ただけで身の毛がよだち悪寒の止まらないローレシア王に、死神の呼び名の由来を理解する。

ーーーバズズ様バズズ様バズズ様っっ!!!

ロンダルキアに赴く際に、身体能力が高く翼を持つデビルロードはロンダルキアの洞窟を経由する必要がない。

彼は大急ぎで山々を踏破し、空を滑空し、バズズの元、ハーゴン神殿内部へと駆け付ける。

【バズズ様、奴らが!!奴らが洞窟に侵入してきました!!】

【シモン、落ち着け。】

【……っ!!】
強大な力を持つバズズの落ち着いた声に、シモンは取り乱した己を恥じ入る。
【メローネ、以前指示していた箇所に待機し、陣形を張れ。シモン、悪魔神官の半数を呼び出せ。奴らの蘇生を行う。】
【はっ!!】
メローネはひざまずき、速やかに作戦行動に移る。彼はシルバーデビルとブリザード、神殿内部の半数の悪魔神官を率いて神殿の外へと出て行った。
バズズはシモンと残りの半数の悪魔神官達を引き連れ、ハーゴン神殿内の霊安室と呼ぶべき場所へと向かう。
【やれ。】
【はっ!!】
二体の氷像をシモンと複数の悪魔神官達が取り囲む。
二体の氷像にシモンはベギラマを唱え、氷を溶かしていく。
氷の溶けた二つの遺体に、悪魔神官達は魔力を生命力に変換して注いでいく。
【【蘇生呪文(ザオリク)!!】】
蒼白だった二体の体に徐々に血色が戻っていき、やがて二体は静かに目を開く。
【悪魔神官はシモンの指示に付き従え。】
蘇生完了を確認したバズズは、部屋の中にいる配下へと指示を出す。
シモンは悪魔神官達を率いて、部屋の外へと出て行った。
【……貴様、何の真似だ?】
目を開けてゆっくりと上体を起こしたベリアルは殺気を隠そうともせずに、バズズを睨みつける。目を覚ますなり即座に状況を理解した彼は、不倶戴天の敵であるバズズが自身を蘇らせたという事実が、いたく不愉快だった。
【時間がないから簡潔に言う。死神達が今一度ロンダルキアに進攻して来ている。俺に力を貸せ。】

【何故俺が貴様なんぞの言うことをおとなしく聞かねばならん？】
霊安室に緊張感が漂い、ただでさえ寒い室内はさらに冷えきっていく。
知能の高いベリアルはバズズに反発し、本能で強大な敵が向かってきていることを理解しているアトラスはことの成り行きを見守っている。
【貴様が弱者だからだ。】
【何だと!?】
己の力に絶対の自身を持つベリアルは、バズズの言葉に激高する。
【貴様だけではない。俺も弱者だ。弱者に勝ち方は選べない。黙って俺に従え。】
【貴様っっ!!何を言っている！】
【わかっているだろう？俺達は既に一度奴らに情けなく負けている。このまま再び戦ってもどうせまた殺されるのがオチだ。】
【だから貴様に従えだと!?ふざけるな！貴様が俺に従うべきだろう!!】
やはりこうなるか、とバズズは内心でため息をつく。
バズズはベリアルの性格を考慮して、会話の流れをシミュレートしていた。
【どうしても従えないならば仕方ない。互いの妥協点だ。俺の言うことを聞かなくていい。お前は奴らの内の一人と戦え。俺も一人と戦う。アトラスもだ。従う必要はないからそれぞれで邪魔しないように敵と勝手に戦うことにする。】
バズズは思考に思考を重ねた末、ベリアルとアトラスを従わせるには三匹でバラバラに戦うしかないと結論を出していた。彼ら三匹はどうせ協力などできるわけがない。それぞれを最高に生かすためにはバラバラに戦うのが一番よい方法だと考えていた。
そして、当初からの予定をあたかも互いの妥協点のように会話を誘導していく。
いわゆる詐欺師の好む手法であった。バズズは、狡猾だった。
【一番強いベリアル（お前）は一番強い敵（ローレシア王）を相手にしろ。アトラスは好きに

奴らに襲い掛かれ。ベリアルは相手を階下に落として戦え。俺は相手を攫う。】

【なぜ貴様なんぞの言うことをっっ!!】

【言ったろう?俺達が弱いからだよ!俺達が強かったら既に奴らは死んでいたはずだ。俺達は既に全員、相手を舐めて三人をまとめて相手にして負けてるだろうが。だから一対一にするんだよ。お前は俺に蘇生の借りがあるんだから、たった一度だけ言うことを聞け!】

【ぐっっ!!】

ベリアルは黙り込み、アトラスは以前より強大になったバズズの威圧を敏感に感じ取り、目を見開く。

ーーーまあもっとも、一度俺の言うことを聞いてしまったその後は生きてはいないだろうがな。

バズズは内心で鼻で笑う。

彼は三人の英雄達の中でも、ローレシア王はさらに一人だけ突出した実力を持っていると看破していた。いくらベリアルが強かろうとも奴に勝つことは不可能だろう、と。しかしそれでも、ベリアルはそれなりに敵に痛手を負わせることだろう。

【さあ、ついて来い。決戦の地は既に決めている。】

バズズはハーゴン神殿の階段へ向かう。

彼らは神殿を、上階へと登って行った。

6

???

ーーー▲▲▲▲よ、聞こえていますか？
清浄な庵、黄昏を思わせる色合い、目の前には暖かな光。
私は、理解ができない状況に戸惑った。
「あなたは何者なのですか？」
ーーー▲▲▲▲よ、聞いてください。世界に危機が迫っています。敵は、ロンダルキアの悪魔王です。邪悪で強大な力を持っています。放っておけばますます強大になり、いずれ手を付けられなくなるでしょう。ロトの血脈よ、敵を打ち倒すのです。私は聖霊▼▼▼。私のかわいい子供達よ、私はあなた達を、いつでも見守っています。
光はやがて消え去っていく。
「夢……か。悪魔王、ロンダルキアの首謀者のことか？」
夜中に目を覚ました王は夢の意味を考える。

□□
バズズがハーゴン神殿内部にて作戦の指示を出している頃、三人の英雄達はロンダルキアの洞窟を突き進んでいた。
「つまり、俺達が今ここでこうしていることは敵に筒抜けだってことか。」
「……ああ。」
サマルトリア王がドラゴンの首をはやぶさのけんで切り落としながらローレシア王へと話しかける。ローレシア王はキラーマシンの複数の手足をすべて切り落として達磨にして、強靭なはずの装甲を容易く袈裟に切り捨てる。
ローレシア王は、ロンダルキア洞窟に侵入する際に監視の視線に気付き、監視者がロンダルキア山岳地帯の方角へと向かったことを確認していた。

「ローレシア王国は大丈夫かしら？」
ムーンブルク女王の杖先から巨大な光球（イオナズン）が天井に向かって炸裂する。
ボトボトと複数の肉片が飛び散った目玉のモンスター、ダークアイの残骸が天井より落下して来る。
「目の前のことに集中するしかないだろう。可能な限り迅速に行動し、一刻も早くローレシアに帰還する。」
「しかしなぁ。迅速にって言っても敵の罠のことも考えなきゃならんだろ。」
「それでも彼の言う通りにするしかないわ。あなたが見たっていう変な夢のことも気になるし。」
三人の英雄達はどんどんロンダルキアの洞窟を先へ進んでいく。
彼らにとっては既に、最難関のはずのロンダルキアの洞窟すらなんら脅威になっていなかった。
彼らはさほどの苦労をせずに、やがてロンダルキアの洞窟の出口へと到着する。
洞窟を抜けた先は、三人がかつて脅威を感じた雪景色。死の大地ロンダルキア。
「いつ見ても気分の悪くなる土地ね。」
雪に覆われた大地に数多の死霊の怨念を感じ取り、ムーンブルク女王が呟く。
そう呟く彼女の足の下の雪の中には、先に出立して死呪を受けたローレシア先遣隊が眠っている。
「敵が来た。フォローを頼む。」
「ええ。任せて！」
彼らはロンダルキアに着くと同時にギガンテスの群れに襲われる。
サマルトリア王が仲間に防御呪文（スクルト）をかけて、ムーンブルク女王がギガンテスに幻覚呪文（マヌーサ）をかける。ローレシア王がギガンテスの群れに突貫して気を引き、ギガンテスの背後からサマルトリア王の死呪（ザラキ）がギガンテスの命を刈り取っていく。
「進むぞ。」

彼らはロンダルキアの吹雪を正面から受け、それでもひたすらに先へと進む。

■■

彼らがギガンテスの群れと戦っている最中、少し離れたハーゴン神殿の吹きさらしになった最上階でバズズは吹雪に晒されながら三人の英雄達とギガンテスの群れの戦いを見ていた。

ーーーやはり強いな。何より三人とも互いのことを理解して当たり前のように補助している。俺達の連携ではとても太刀打ちできない。三対三では勝ち目がない。当初の予定通り一対一を三つに分ける他はないだろう。

バズズは階段を下りていく。

□□

「どう思う？」

「神殿にたくさん集まっているということか、あるいはサマルトリア襲撃の際に全部の兵を使いきってしまったのか？」

「あまり楽観的に考えるべきではないわ。いずれにせよ神殿に侵入してみればわかることだし。」

「神殿内で何らかの作戦をとっていると見るべきではないか？」

「……そうね。」

ロンダルキアを進む彼らは、ロンダルキアに違和感を感じていた。

道中に現れる魔物は、キラーマシンとサイクロプスとギガンテスとアークデーモン。サマルトリア襲撃を担っていたシルバーデビルと悪魔神官とデビルロード、それとブリザードの姿を一切見ないのである。

そして、敵が神殿で何らかの罠を張って待ち受けている可能性が高いと判断した彼らは、一層の気を引き締める。

「到着、だな。」

「ああ。」

「ええ。」

巨大な建造物、ハーゴン神殿を三人は見上げる。

荘厳な神殿は、かつての戦いの影響でボロボロになり各所に穴が空

いている。傍目には廃墟だと言ってもおかしくない状況ではあるが、それでもかつての名残か、凶々しさを三人は感じていた。
「以前のように建物に認識を阻害する結界は張られていないわ。」
「そうか。じゃあルビスのまもりやじゃしんのぞうは必要なかったということか。」
辺りを警戒しながら、三人は神殿内部へと進入していく。
「強い魔力を感じるわ。上の方。でも変ね。この建物の中にはおそらく数はほとんどいないわ。」
「どれくらいいるかわかるか？」
「ちょっと距離があって正確にはわからないけど、十くらいだと思うわ。」
「そうか。」
三人は以前に神殿に侵入して数多くの魔物を殺害して回った。しかしそれにしても敵が少な過ぎると神殿内部の魔力を感知した女王は首を傾げる。
三人は、階上へと向かい、荒れ果てた神殿を進んでいく。
□□
「近いわ。強大な魔力を感じる。これはおそらく……かつて感じたアトラスとベリアル？あともう一つ……バズズかしら？」
「奴らか。しかし確かに以前俺達は奴らを倒したはずだ……。」
「俺達が詰めを誤ったということだろう。」
サマルトリア王は自身達の詰めの甘さが惨劇を引き起こしたと理解し、ほぞをかむ。
「気を付けて。敵はすぐ上の階にいるわ。それと他のモンスターもいるみたい。総攻撃をかけて来るかもしれない。」
ここはハーゴン神殿の４階層。既に地上から五十メートルほど離れた摩天である。なぜたった４階でこれほどの高度なのか補足を付け足しておこう。ハーゴン神殿にはアトラスやベリアルのような大型の魔物が多数存在していたため、一つの階層の高さがおよそ十五メートルにも及ぶのである。
かつて三人がアトラスと激闘を行ったそこは、そこかしこの床や壁

に穴が開いている。
いつ敵が襲い来るかわからない状況に、三人は最大限の警戒をしながら進んでいく。
■■
【奴らが来た。やれ、アトラス。】
【ウガ……。】
□■
唐突に上層より飛び降りて来る巨体、力の悪魔アトラス。
彼は、上の階層から十メートルを超える巨体で階下に繋がる穴に向かって、飛び降りる。
落下する巨大な質量、彼は手に持つこん棒を振り上げ、落下のエネルギーとともに階下の敵に向かい力任せに振り下ろす。
「来たぞ!!避けろ!!」
叫ぶローレシア王、三人はアトラスの奇襲を感じ取る。こん棒の強烈な一撃に神殿の床に穴が開く。三人とも避けたことをローレシア王が確認した刹那。
「馬鹿な!?●●●!!」
「●●●!!」
ローレシア王とムーンブルク女王の悲鳴が上がる。
巨体のアトラスの背中より、密かに張り付いて隠れていたバズズがサマルトリア王に奇襲する。サマルトリア王は敵の爪を剣で受け止めるが、バズズはそのままサマルトリア王を掴んで背中の羽を広げて神殿の崩壊した壁より外へと飛び立っていく。
さらに立て続けに仲間が攫われて動揺したローレシア王の足元にベリアルの光球(イオナズン)が炸裂する。飛びのいたローレシア王の元にベリアルが高速で飛翔し、宙で踏ん張りの効かないローレシア王に三叉の槍を突き出した。ローレシア王は剣を立てて受け止め、一瞬拮抗する剣と槍。しかしローレシア王は宙で踏ん張りが効かず、ベリアルは彼を階下の穴へと押しやり共に下階へと落ちていく。
取り残されたムーンブルク女王は仲間との合流を判断するが、目の前にはアトラス、さらに上層よりデビルロードのシモンが五体の悪魔

神官達を率いて階段を下りて来る。
ーーーこれは……まずい!!
専門後衛のムーンブルク女王は力の悪魔との対峙に状況の悪さを理解する。非力な（あくまでも彼らの中ではの話だが）彼女はローレシア王というあまりにも信頼性の高い盾無しに、力の悪魔を相手取らなければならない。
【敵を階下に行かせるな!・悪魔神官は俺の指示通りに動け!・】
局面は三つ。ローレシア王対ベリアル、サマルトリア王対バズズ、ムーンブルク女王対アトラス。その中でも確実に勝利したい戦局に、シモンは声を張り上げ指示を出す。
アトラスはこん棒を振り回し、ムーンブルク女王に向かって振り下ろす。
□■
ロンダルキア山岳地帯大森林。周囲は針葉樹林と積雪に囲まれている。
サマルトリア王はバズズに攫われ上空から落とされ、今ここでバズズと対峙していた。
五十メートルの高さより雪原に墜落させられたサマルトリア王は、ちからのたてを掲げて落下時の傷の回復を図る。
【やはりたいして傷を負わんか。結構な高さから落としたはずなのだがな。】
「貴様……。」
サマルトリア王の目前には猿怪王バズズ。彼らは距離を取って対峙する。
「貴様!・言え!・なぜ貴様は生きている?・サマルトリア王国を滅ぼしたのは誰の命令だ!!」
【さあな。そういうことは自分で考えろ。目の前の敵の質問に馬鹿正直に答える意味はない。】
にやけるバズズに苛立つサマルトリア王。
しかし、戦いの経験を積み上げたサマルトリア王は戦闘中に他のことを考えて集中を切らすことの愚かさや危険さを身に染みて理解し

ている。そしてバズズは極めて戦闘力の高い危険な個体。一瞬でサマルトリア王は冷静になる。
【なんだなんだ？急に静かになってどうしたんだ？】
「黙れ！」
サマルトリア王は剣を振りかぶり、バズズへと突進する。
□■
「うおおおおおお!!!」
ベリアルに押されて落下しつづけるローレシア王。ベリアルは羽を上手く使い、空中で上手く身動きの取れないローレシア王を各階層に開いた穴へと上手く誘導してどこまでも落としつづける。
ーーードガアアアアアッッ!!
ローレシア王はハーゴン神殿の瓦礫に、落下の勢いのまま突っ込むことになる。羽を使い着地するベリアル。
ローレシア王は四階から落とされつづけて、一階まで押し戻されてしまった。
そして、彼を追撃で襲うベリアルの光球（イオナズン）。
「ぐっっ！」
ローレシア王は被弾して、ダメージを受けながらも立ち上がり、仲間と合流しようと階段へと向かおうとする。
【フン。やはり馬鹿げた頑丈さだ。】
五十メートル近い上空から瓦礫に落下し、イオナズンの直撃を喰らったにも関わらず、多少の怪我のみで平気で立ち上がるローレシア王にベリアルは呆れる。
ベリアルは階段の前に陣取り、両手で槍を振り下ろす。頭上で剣を横にして、片手で易々と受け止めるローレシア王。
「どけっっ!!」
【お断りだ。貴様には以前の恨みをはらさせてもらおうか。】
ローレシア王の前に静かに槍を構える牛鬼。
ローレシア王は、目の前の敵を倒さない限り仲間と合流は不可能だと理解した。
ハーゴン神殿一階で、雷神が必殺の横薙ぎを放った。

7

□■

【ウガアアアアッッ!!】

力の悪魔アトラスはこん棒を振り回し、ムーンブルク女王はそれを必死に避けつづける。

頬を風圧が霞め、華奢な（やはり彼らの中ではという冠詞がつくが）彼女は一撃でも直撃を喰らえばほぼ即死であろう。

【やれ！】

【イオナズン!!】

シモンの指示を受けた悪魔神官が両手に持つ鉄球を頭上に掲げ魔力を収束させる。階下に向かう落とし穴に向かい走っていたムーンブルク女王は、イオナズンを避けるも爆風により穴から遠くに吹き飛ばされる。

【ガアアッッ!!】

吹き飛ばされた女王にアトラスのこん棒が振り下ろされ、女王は必死に床を転がって避ける。破片が飛び散り、女王はかすり傷を負う。

【いいぞ！絶対に下に逃がすな！ロンダルキアの存亡はお前達の働きにかかっている！】

シモンが悪魔神官達を鼓舞する。

ーーーどうするどうするどうする！集中して魔力を込める時間が取れない！逃げることもできない！まずい!!

以前サマルトリア王城で対峙した強力なデビルロードと比べても、アトラスの膂力は破格であり、杖で受けたら杖ごとペシャンコになるだろう。

至近で振るわれる強大な暴力を受けて、現状を打開するために女王の頭脳は目まぐるしく思考を重ねていく。

□■

サマルトリア王は雪原を駆けて、バズズにはやぶさのけんを振り下ろす。対峙するバズズは、爪ではやぶさのけんを受け止める。そしてバズズが爪を振り下ろす。今度はサマルトリア王が剣で受け止める。

バズズは巧みに樹木や枝を利用し幾度もサマルトリア王に飛び掛かり、サマルトリア王も雪原を走りながら幾度も相手に襲撃をかける。
そして、無数のそれの繰り返し。
ーーーギキキキキキンッッ!!
擦れ違いざまの一瞬に、およそ十合にも及ぶ剣と爪の応酬。
「ベギラマ!!」
【ベギラマ!!】
サマルトリア王とバズズの中間地点で、二つの火炎がぶつかり合う。
サマルトリア王とバズズは共に万能な業師(オールマイティトリックスター)。はっきり言って二人の戦い方は、非常に似通っていた。
「くっ!」
ベギラマを相殺されたサマルトリア王は至近距離ではやぶさのけんで斬りかかる。V字の斬り落としからの斬り上げ。しかしバズズはそっとはやぶさのけんの軌道に爪を添えて、それだけで敵の攻撃を自身に当たらない軌道へと書き換える。
ーーーこいつっ!!もしかして!
サマルトリア王は嫌な予感を感じとる。
□■
雷神の意志にいなづまのけんが呼応して、吠え猛る。ローレシア王は全身の筋肉を使い、目前のベリアルに対して力任せの横薙ぎを放つ。
【やはりというか、馬鹿げている。】
ベリアルはローレシア王の攻撃を槍で受けて、自分から後ろに飛ぶ。
ベリアルは敵の攻撃を受け流したにも関わらず、吹き飛ばされ階段に埋まり、彼の手は痺れている。
相変わらずの馬鹿げた威力に、ベリアルはため息をつく。
ローレシア王の必殺の横薙ぎは、ただの横薙ぎである。
ただの横薙ぎのはずだ。たぶん。
この時代に確立した技能で後世に遺されたものは、全て英雄の三人

の生み出した技能である。剣技や呪文は時代とともに進歩して、年を経るごとに強力なものが生み出されていく。
例えば、ムーンブルク女王は呪文の専門家（スペシャリスト）であり、自在に魔力を込めて大小様々なイオナズンを放つことができる。彼女が放つ極大のイオナズンは、後世で研究されてビッグバンという新しい呪文の雛形となる。
例えば、サマルトリア王の素早くて自在な剣技は、はやぶさぎりや剣の舞い、火炎ぎりなどの多彩な技の源流である。
そして、ローレシア王の雷撃を纏った力任せの横薙ぎは、後世のギガスラッシュという必殺の技能の元である。雷撃の理由は、たまたま彼の愛用の武器がいなづまのけんという雷を纏う特性を持っていたものだったに過ぎない。人々は彼のただの横薙ぎをロトの秘剣と思い込み、全く違う原理の一つの技能の頂点とも言える必殺技を編み出すこととなる。
そして、技能は後世になるほどに強力に洗練されていく。
ビッグバンはムーンブルク女王のイオナズンより強力だし、剣の舞はサマルトリア王のはやぶさのけんの剣技より手数が多い。
しかし、ローレシア王のただの横薙ぎだけは……後世に編み出されたギガスラッシュよりも強力だった。その根拠は破壊の爪痕である。ギガスラッシュはローレシア王のただの横薙ぎが残した破壊痕を超えられなかった。そしてむきになった武芸者達により、ギガブレイクというさらなる技が編み出されることになる。これ以上書いても無意味なため、ギガブレイクとただの横薙ぎのどちらが強力だったかの言及はやめておこう。
階段に吹き飛ばされたベリアルは追撃の縦斬りを槍の柄で受けて、自身にベホマをかける。
最上位悪魔であるベリアルは、槍による攻撃と呪文発動の同時行動が可能だった。
「どけ!!」
【退かん!!】
ベリアルはつばぜり合いをするローレシア王の腹を蹴り、距離をと

る。
「貴様らは一体誰の命令で動いている？」
【俺は知らん。バズズに聞け。】
ローレシア王は何度も何度も斬り付け、ベリアルはそれを槍を器用に回しながら捌いていく。
「バズズだと！奴が首謀者なのか？」
【知らんといっただろう。】
ベリアルはローレシア王の突きを槍の先端に器用に絡ませて受け止め、自身に防御魔法（スクルト）を重ねがける。
ローレシア王は敵の戦術を理解して、焦りを覚えた。
□■
ムーンブルク女王はベリアルの攻撃を避けつづけていた。
時に上手くアトラスから距離を置いても、階下に向かう穴や階段に向かっても、悪魔神官から光球（イオナズン）が飛んで来る。彼女は傷だらけであり、八方塞がりであった。
しかし、追い詰められたバズズが進化したように、追い詰められた彼女もまた、進化しようとしていた。
【ガアアッッ!!】
アトラスの振り下ろしを女王は勇気を出して前に進んで避ける。
アトラスの弱点の一つはその小回りの利かなさである。とは行っても、その絶大な膂力という長所と表裏一体なのだが。
女王はアトラスの股下を通り階下に向かう穴に向かい、悪魔神官は彼女に光球（イオナズン）を放つ。一見今までの焼き増し。しかし女王は突如いかづちのつえを掲げる。
ーーー何のつもりだ？
シモンは謎の行動を起こした女王をいぶかしむ。
女王のつえにぶつかった悪魔神官の光球は爆発を起こさず進路を変更させる。突如謎の軌道を辿ったイオナズンに悪魔神官の一匹は虚をつかれ、イオナズンの直撃に沈む。
ーーーできた！
女王が使った技術は、いわゆる後世で反射魔法（マホカンタ）と呼ばれる呪文と

遮断魔法（マホステ）と呼ばれる呪文の複合技術である。
マホカンタは魔力指向制御平面と呼ばれる反射板であらゆる呪文に波長を合わせて方向を変える呪文。マホステは己の周囲に魔力遮断領域と呼ばれる領域を発生させて呪文を遮断する呪文。どちらの呪文も共通していることは、相手の呪文に応じて展開される呪文の波長が変化する術式が組み込まれていることである。
例えばベギラマは、魔法と炎の両方の特性を持つと推測される。ベギラマを喰らった敵は焼け焦げる。これは炎と同じである。そして、ただの炎がマホカンタに弾かれることはないが、ベギラマはマホカンタに弾かれる。
イオナズンは魔法と爆弾の両方の性質を持つと考えられる。イオナズンは物質あるいは異波長の魔力に着弾してはじけ飛ぶ。しかしマホカンタはイオナズンを弾く。マホカンタにぶつかってもイオナズンはその場で爆発しない。つまりイオナズンという爆弾は、破裂させない方法が存在するということである。
そして呪文に関する知識の深い彼女は、あらゆる呪文の原理と深奥も理解している。敵のイオナズンと同じ波長の魔力をつえに纏わせて敵のイオナズンの方向を変えた、呪文を受け流した、ただそれだけである。
それだけであるが実際、彼女の行動は悪魔じみている。例えば二つのイオナズンがぶつかれば、それは炸裂する。それはたとえ同じイオナズンであったとしても個々人で込められた魔力の波長が違うことを意味している。呪文の専門家の彼女は、悪魔神官の放った光球の魔力の波長を即座に見抜いて杖に纏わせたのである。そして理屈を理解しているだけのぶっつけ本番の技術を使って、悪魔神官のイオナズンの軌道を変えた。
そしてそれは戦局を変化させるのには十分であった。
【落ち着け！・イオナズンは使うな!!ちっ!!】
つぎつぎに打ち出した光球があらぬ方向へ弾かれて、うろたえる悪魔神官達にシモンは指示を飛ばす。階下へ向かう穴に近づく女王にシモンは飛び掛かる。

悪魔神官は至近戦が苦手なために、指揮に専念していたシモンも前線に出ざるを得なくなった。

□■

「マホトーン!!」

【無意味だな。一手無駄にしたな。】

バズズはサマルトリア王の放つ封印呪文(マホトーン)を無視してサマルトリア王の腹部に爪を突き立てる。バズズは魔法無しでもサマルトリア王を圧倒できると判断していた。腹部から血を撒きながら、サマルトリア王は吹き飛ばされて顔から雪に突っ込んだ。サマルトリア王は敵の追撃を嫌い急いで立ち上がる。

「ハァ、ハァ、ハァ、……」

【どうした?もう息切れか?】

サマルトリア王が肩で息をする。

似たもの同士の戦いは、圧倒的にバズズに軍配が上がっていた。その理由は簡単である。二人は似たタイプで、近い実力を持っているが、あらゆる面に置いてバズズはサマルトリア王を上回っているのである。ゆえにサマルトリア王に勝ち目はなかった。

ーーーやはりこいつ!!以前より実力が上がっていやがる!!

サマルトリア王は敵の実力が予想よりも高かったために、甚だ苦しい戦いを強いられていた。彼が以前バズズと戦った時は、彼と互角ぐらいの実力だと認識していた。まあもっともその時は三対一ではあったのだが。

対するバズズは、サマルトリア王に当初の予想より粘られていると判断していた。そして、その理由を彼はすでに看破していた。

ーーーあの盾だな。あれが奴の戦闘を支えている。

サマルトリア王の装備。はやぶさのけん、まほうのよろい、ちからのたて、ふしぎなぼうし。どれも一級品質ではあるが、特に念じれば傷を回復させる特性を持つちからのたてが自身が敵を打倒しきれていない状況に持って行っていることを、バズズは理解していた。

ーーーフン、ならば。

バズズは右拳を握って敵を殴りつける。サマルトリア王は盾で受

け止め、バズズは殴り込んだ手を開いて盾を握り自身の元へ敵を引き寄せる。引き寄せられたサマルトリア王は右手の剣でバズズを斬り付けようとするも、バズズは平気で傷を負いながら左の手の平で受け止める。両者共に両手が塞がっている状況で、近距離から首筋に噛み付こうとするバズズにサマルトリア王は力ずくで逃げだそうとする。しかし敵が離さない。死に物狂いで逃げようとするも、敵は離さない。何とかはやぶさのけんを引き抜き、どうしても引きはがせないちからのたてをサマルトリア王は思わず手放してしまう。

【これで終わりだな。】

バズズは手の上でちからのたてを弄ぶ。確実に敵を始末するためにバズズはあえて、はやぶさのけんは相手に返していた。

剣も盾も失うとなったら、あの瞬間サマルトリア王は悲観してメガンテでバズズを巻き添えにしようとしていたかもしれない。ゆえに剣を返す代わりに盾をもぎ取り、剣があるからまだ戦えるという希望を相手に残しておいた。安易に追い詰めすぎないように。そして盾も離さないと敵がごねたら、バズズはそのままサマルトリア王の首筋に噛み付いて体内に火炎の息を流し込んでいただろう。

【メローネ、捨ててこい！】

【はっ!!】

さらに雪原には切り札として部下も潜ませている。サマルトリア王はただでさえ良くなかった状況がさらに悪くなったことを理解した。

□■

「貴様、何のつもりだ！」

【さて、な。】

ローレシア王が思わず叫ぶ。

ローレシア王はベリアルが防衛に専念して、時間稼ぎに徹していることを理解していた。そして、時間を稼がれるほど上階にいるムーンブルク女王は敗北の危険性が高くなるとローレシア王はそう判断していた。サマルトリア王の方は予想が付かないが、楽観視はできない。

「はあああっっ!!」
【ヌウウッッ!】
ローレシア王は速度を上げてベリアルに突きの連激を放つ。ベリアルは槍で弾こうとするも、幾つか打ち漏らして皮膚にいくつもの傷を受ける。ベリアルは受けに周りながら自身に回復魔法(ベホマ)をかける。いらついたローレシア王の必殺の横薙ぎ。ベリアルは全力で槍を立てて、防御の姿勢に回る。
【ウグッ!!】
スクルトを重ねがけて全力で防御したにも関わらず、槍は酷く折れ曲がり自身の腕に深い傷痕ができる。挙げ句にいなづまのけんの特性により、ベリアルは帯電している。追撃するローレシア王にベリアルは羽を使い階段方向に退避する。
ーーー持たん。仕方あるまい。少しずつ上層に移動しながら戦うしかないか。
ベリアルは自身にベホマをかけて、相手の攻撃を流しつつ無理をしないように少しずつ上の階層に逃げながら時間を稼ぐことを決める。
ローレシア王の縦の斬り落としをベリアルは曲がった槍の先の三叉で受け、同時にローレシア王に向かい光球(イオナズン)を放つ。ローレシア王は剣を引き、光球を斬り飛ばす。絶好の場面でもベリアルは追撃しない。傷を負ってでも早く勝負を付けたいローレシア王は、ベリアルの嫌らしい戦いに眉をひそめる。
ベリアルは、己の強さに絶対の自身を持つ誇り高い悪魔である。時間稼ぎするなど、彼にとっては屈辱以外の何物でもない。
ならば、なぜ彼は時間稼ぎをしているのだ?
アトラスとバズズとベリアルは腐れ縁である。腐れ縁であり、幾度となく争った仲である。ベリアルは誇りに重きを置き、強さに絶対の価値を見出だす。そんな彼がハーゴン神殿で門番をしていたのは、単純に破壊神シドーが絶対的な強さをほこっていたからである。
そして、バズズにより蘇生されたベリアルは、バズズの醸し出す威圧に驚いていた。かつては僅かではあっても自身が勝っているという自負があった。しかし、蘇生された彼の目の前の同胞は、かつて彼

が側で仕えた破壊神に比肩する強大な威圧を醸していた。
力が絶対の彼である。しかし長年競い合ったライバルに降るのは彼のプライドが許さなかった。ゆえにバズズは蘇生の恩を返せという理屈を作りだし、ベリアルは蘇生の恩を返すという理由に飛び付いた。バズズはあえて騙して、ベリアルはあえて騙された。実は二人のやり取りは予定調和だったのである。それほどに彼らは腐れ縁であり、互いのことを理解していた。
そして騙されて最も強い敵にぶつけられた彼であったが、それがバズズが導き出した最も勝率の高い策なのであろうということを理解していた。ベリアル自身ローレシア王には逆立ちしても勝てないだろうことも。しかし勝てない相手に自分がぶつけられたからには、バズズは自身に対して望んでいることがあるのだろうと、そう理解していた。
たとえバズズのことは嫌いであっても、ロンダルキアのことはベリアルは愛していた。バズズもロンダルキアを愛し、必死であるだろうことも。そしてそれを理由に、ベリアルはバズズの望むであろう戦い方を続ける。
ロンダルキアのためだから仕方がない。ベリアルはそう言い訳をしてひたすらに時間を稼ぐ。
絶望的な相手を前に、ベリアルは笑いながら戦っていた。

8

□■

シモンの爪とムーンブルク女王の杖が交錯し、アトラスがこん棒で敵味方の区別を付けず二人纏めて叩き潰そうとする。

【シモン様っっ!!】

悪魔神官が声を張り上げる。

シモンとムーンブルク女王は共に引いてアトラスの致死のこん棒の一撃を避ける。

【敵が階下に向かう素振りを見せたら命懸けで体を張れ！イオナズンは敵に直撃させずに爆風だけを当てるように打ち込め!!】

シモンの指示が飛ぶ。

ーーーまずいまずいまずいまずい!!!

シモンは焦る。

ムーンブルク女王はすでに杖を媒介にせず自在に空間に反射板を展開し、彼女自身が被弾しない光球(イオナズン)すら弾き返している。圧倒的有利で始まったはずの戦局がなぜこんなことに?

【イオナズンはもう使用するな！敵を階下に向かわせないことに専念し、体を張って敵を止めろ！】

指示を出すシモンもすでに前線に出ていて、自身も命を懸けざるをえないことを理解していた。

以前に書いた通り、バズズにとってこの戦局は三つのうちでも最も確実に勝利しないといけない局面である。にも関わらず敵はしぶとく戦い、攻撃を避けつづけ、あまつさえ援護の呪文を弾き返して来ている。弾かれた光球はしばしば悪魔神官やベリアルに直撃している。生命力が高くとも魔力の低いアトラスは、いつまでもイオナズンを喰らって立ち続けられるわけでもない。そして最悪なのが、アトラスを近接戦で援護しなくてはいけなくなったことである。

アトラスは巨大な力を誇るが、弱点も多い。呪文に弱く、知能が低いため搦め手が使えず、小回りが利かない。そして最大の弱点は、下手な共闘をするとアトラスの攻撃に味方も巻き込まれることである。

ゆえに今まではシモンは、距離を離して呪文の援護に専念していた。
戦闘は続いている。
アトラスの力任せの攻撃に悪魔神官が巻き込まれ、ハーゴン神殿の床のしみになっている。五体の悪魔神官はすでに二体まで数を減らし、肝心の女王はアトラスの攻撃を躱し続けている。敵は当たれば一撃で潰せるだろうが、いつになっても当たらないのである。ムーンブルク女王もシモンも共に必死である。
ーーー……っ使うしかないのか？くそっ!!
アトラスの同士討ちを避けながら女王を仕留めることはリスクが高すぎ、確実性に欠ける。自身が先にアトラスに潰される可能性を否定できない。
シモンは切り札である自爆呪文（メガンテ）の使用を視野に入れはじめていた。
□■
サマルトリア王とバズズの戦いはすでに一方的であり、勝敗は決したといってもいい状況だった。ちからのたての補助を失ったサマルトリア王は、しぶとく戦うも魔力が尽き、回復もままならない。
「あああああっ!!」
【おっと！】
サマルトリア王は破れかぶれにバズズに突っ掛かるが、まるで当たらない。擦れ違いざまにバズズに足に爪を突き立てられる。バズズはバランスを失い倒れ込むサマルトリア王に追撃の爪撃を喰らわせようとする。バズズの爪を必死に剣で防ぐサマルトリア王の腹にバズズは蹴りを入れる。サマルトリア王は雪原を血を吐きながら転がっていく。
ーーーもう俺に勝ち目はない。他の二人の状況はわからんが……。しかしもう俺には二人に托すしかできない。
敵は強く、自身にはもう勝ち目のない状況。サマルトリア王は内心で覚悟を決めて自爆呪文（メガンテ）の使用を決心する。そんなサマルトリア王をバズズは冷静に見ていた。
バズズは用心深かった。バズズは自身に切り札として自爆呪文（メガンテ）がある。ゆえに追い詰めた相手の切り札を警戒していた。そしてたま

たまサマルトリア王の切り札もバズズと同じ自爆呪文（メガンテ）だった。
バズズは冷静に、冷酷に、サマルトリア王を観察していた。
□■
【フン、ヌゥウン！】
「はあぁっっ!!」
ローレシア王とベリアルの戦いは、徹頭徹尾ローレシア王が優勢だった。引きながら戦うベリアルはドンドン階上に押しやられ、すでに三階層。これ以上相手を通すわけにはいかない。攻撃を捌きながら自身に回復魔法をかけつづけていたために魔力も著しく減衰している。ベリアルの内包する魔力は莫大なはずだったのだが。
ーーーこの辺りが死に場所か。
ベリアルは戦いながらそうごちる。すでに一度死んでいた彼は、二度の蘇生が起きるなどという奇跡は夢にも思っていない。敵は一度倒したはずのベリアルが二度と迷い出て来ないように完封なきまでに死体を破壊し尽くすだろう。
ローレシア王は必殺の横薙ぎを使わない。普通に戦って圧倒できることと、敵が専守防衛の為に必殺の一撃でも決殺ができないためだ。必殺の横薙ぎは魔法力こそ消費しないが、全身の筋肉を限界まで酷使するために多用すると筋繊維が裂けはじめる。いわゆる筋肉痛である。それだけならまだいいのだが、下手をすれば筋断裂をおこして、甚だ先の戦闘が不利になる。
そして、先に述べた通りに全力戦闘を控えてなおもローレシア王はベリアルを圧倒する。ベリアルの曲がった槍は、ローレシア王の苛烈な剣激を受けてすでに折れていた。
ベリアルは絶望的な戦いを前に、ただ不敵に笑う。
□■
シモンの爪の攻撃を、ムーンブルク女王はいかづちのつえで防ぐ。至近距離でシモンは甘い息を吐き、必死な女王は舌を噛み切り意識を保つ。そこへ迫り来るアトラスの横薙ぎ、女王は前転で躱し、シモンはかすっただけで壁まで吹き飛ばされる。隙を見て階下に向かう階段へ走る女王。叫ぶシモン。

【命を張って止めろおおぉぉぉっっ!!敵を絶対に階下に行かせるなあぁぁぁ!!】
女王の前に最後の悪魔神官が道をふさぐ。悪魔神官は鉄球を振り回し、女王は迂回する。
【アアアアアアッッ!!】
体から血を流したシモンが痛む体に鞭を撃って最高速で女王に迫る。それら一切の状況を無視してアトラスのこん棒が振るわれる。
【グペッッ!!】
女王とシモンは避け、身体能力の低い悪魔神官が巻き込まれて血霞に消える。
一向に好転しない状況を前に、シモンはすでに自身の命を使って確実に仕留める覚悟を決めていた。
ーーーバズズ様バズズ様バズズ様っっ!!
シモンはムーンブルク女王に飛び付いて四肢を絡ませる。
膨れ上がる魔力、暴走する生命。デビルロード必殺の切り札自爆呪文。
ハーゴン神殿の四階で凶悪な爆弾が炸裂した。

ーーー危なかった。上手くいった。
ムーンブルク女王は安堵する。女王は爆弾が炸裂した後も健在であった。
女王は自身の魔力を敵のメガンテの波長に合わせてやり過ごした。いわゆる遮断魔法である。先だって、すでに一度サマルトリア王国で別のデビルロードの自爆という近しい魔法を見ていたことが、彼女に敵の自爆をやり過ごすことを可能にした。
そしてシモンの切り札であっただろう必死の自爆をやり過ごして、女王は僅かに安堵した。安堵してしまった。これまでの戦いがあまりに集中が必要で、神経を擦り減らすものだった。ゆえに自爆をやり過ごした直後に一瞬、彼女は気を緩めてしまっていた。

【ウガアアアアアッッ!!】
爆弾に巻き込まれて左下肢部と脇腹の消滅したアトラスが痛みに耐えかねて、こん棒を滅法に振り回す。
「あ……
痛恨の一撃。
女王はアトラスのこん棒を頭部に受けて床を転がり、動かなくなった。
□■
バズズは冷静にサマルトリア王を見ながら、思考する。
ーーー敵は満身創痍。戦いは今現在俺が圧倒的に優位だ。切り札があるならなんであれそろそろ使用して然るべきタイミングと言えるだろう。敵に切り札がなければ俺の優位は揺るがない。逆に、敵が切り札を隠し持ちそれが強力なものであるのならば俺は今の優位をゆるぎない勝利に変えるための札を切るべきだろう。
バズズは状況を冷静に俯瞰する。サマルトリア王は体中に傷を負ってろくに動けない状況。確実に仕留めておきたいが、手負いの獣が恐ろしいことを彼の多くの経験から理解していた。ゆえに彼は安全に始末するために切り札を切る。
バズズは咆哮する。
ロンダルキアの悪魔王の咆哮に、雪原に隠れていた部下が駆けつける。
【バズズ様、いかようになさいますか?】
メローネがバズズの脇に立ち、バズズに指示をこう。
【悪魔神官とブリザードを奴の周囲に遠巻きに展開しろ。遠距離から死呪(ザラキ)と爆裂魔法(イオナズン)を打ち込み続けろ。魔力を惜しむな。総攻撃(やれ)だ。】
サマルトリア王は突如現れ自身の周囲を囲む魔物達に戦慄して目を見開く。
ーーーザラキ…ザラキ…ザラキ…ザラキ
ーーーイオナズン…イオナズン…イオナズン…イオナズン
雪原に容赦のない爆撃と死の呪いが飛び交い、サマルトリア王は跡形もなく消滅した。

□■

【グッウッ……】

ローレシア王のいなづまのけんがベリアルの腹部に深々と突き刺さる。ローレシア王の剣激はベリアルの鋼鉄の皮膚をたやすく突き破り、傷だらけのベリアルの腹部より命が少しずつ外へ漏れ出て消えていく。

ベリアルの槍は折れた上に散々にひん曲がり、体内に内包していた莫大な魔力もそのほとんどを失っていた。

ーーー……ここまでか。ふむ、ならば腐れ縁のバズズのために最後に一仕事するか。

ベリアルは終わりを悟り、最後の悪あがきを試みる。

腹部に刺さっている敵のいなづまのけんを掴み、残された全魔力を展開する。

「何のつもりだ？」

【いやなに。ただ負けるのが癪でな。最後にプレゼントだ。つまらないものだが是非もらってくれ。】

ベリアルは攻撃と呪文の同時行動が可能である。それは彼の他の存在にはほとんど不可能な技能である。なぜ普通はそれが不可能なのか？

シンプルに難易度が高すぎるのである。呪文の制御には緻密な計算と魔力の制御が必要であり、行動を起こしながらの呪文は非常に扱いが難しく暴発しやすい。しかし彼の非常に高い知能がそれを可能にしていた。

それは二回行動と呼ばれる特性で、彼が本気を出せば魔法と魔法の二回行動、同時に魔法を二つ展開することすら可能であった。バズズも二回行動が可能ではあったが、それは純粋な速度に因るもの。ベリアルとバズズの二回行動はまったく別のものだった。

そして二回行動の特徴は、二つの行動を並行して同時に行うことである。

ベリアルは前面に火炎魔法（ベギラマ）と爆裂魔法（イオナズン）を展開し、同時に体内で地獄

の炎を練り上げる。
限界を無視した三回行動、どうせこれが最期である。
ベリアルの脳が悲鳴を上げて血管が切れ、鼻から止めどなく血を垂れ流す。
「貴様っっ!!」
【遅い!】
ローレシア王が剣を引き抜き、全力で防御に回る。
ベリアルの体内より出でた地獄の業火が爆裂火球を固定(コーティング)する。二人の眼前で火球と光球は地獄の業火に晒されて、熔けて混ざり合う。莫大なエネルギー体はどんどん収縮し、地獄の赤黒い炎は温度を上げて青黒く変化していく。
青黒く輝く地獄の太陽は周囲に火花を散らし、際限なく肥大したエネルギーは空間を歪ませる。
【喰らいな。】
ジゴスパークとマダンテの中間に位置する即席の業炎魔法。最上位悪魔が残されたありったけの魔力と生命力を込めて造り出す地獄の太陽。
地獄の太陽は飛び散って、周囲に地獄の炎波を幾度となく撒き散らす。
限界を超えたベリアルの必殺の切り札は二人の中間地点で破裂した。

9

□■

ハーゴン神殿第三層で灼熱の熱波が幾度となく荒れ狂う。

「ぐっ!!」

ベリアルと共に至近距離で熱波を喰らったローレシア王は、業炎球の生み出す爆風でハーゴン神殿の壁まで吹き飛ばされて倒れていた。

「うっ、がっ、ああ〝っっ!!」

まるでこれが地獄の苦しみだと言わんばかりの終わりの来ない熱波に、ローレシア王はハーゴン神殿の隅で亀のように丸まって必死に耐えるしかなかった。そして炎は、神殿内の酸素を奪っていく。業炎球を至近で炸裂させたベリアルは、耐熱の皮膚を持っているにも関わらずすでに炭化している。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っっ!!」

ローレシア王は、苦しみのあまりに腕に爪を食い込ませて気絶した。

■■

ロンダルキア山岳地帯大森林。

サマルトリア王を確実に仕留めたバズズは、最後の決着を着けるためにハーゴン神殿に向かっていた。

【バズズ様、我々はいかが致しましょうか?】

メローネがバズズに問う。

【控えておけ。再度お前らの力を借りることになる確率は高い。】

【はっ。畏まりました。】

メローネと悪魔神官、ブリザード達は雪原に消える。

バズズの足はハーゴン神殿へと向かっていた。

□□

ーーー気を失ってしまっていたのか。

神殿三階でローレシア王は気絶から目を覚まし、己の被害状況を確認した。

ーーー傷や火傷は思ったよりも酷くない。露出していた顔面や首

などの肌部は焼けただれているが。ロトの鎧の加護か。
聖霊の強い加護を受けたロトの鎧は、地獄の業炎すらその大部分を遮断していた。
怪我を確認した直後、あることに気付いたローレシア王の顔は真っ青になる。
ーーー静か過ぎる!!馬鹿な!?上の階で物音がしていない!!
ここはハーゴン神殿の三階。すぐに真上でアトラスとムーンブルク女王が戦っていたはずだ。その証拠に、彼が気絶する前までは上の階から破砕音や爆発音が引っ切りなしに聞こえていた。今の神殿内は不気味に静まり返っている。
ーーー逃げきったはずだ!!そうに違いない!!
願望を心で叫びながら、痛む体を気にも留めずにローレシア王は必死に上階へと走っていく。
ーーー有り得ない!!助かっているはずだ!
瓦礫に躓き、足を取られながらも転がるように先へとローレシア王は向かっていく。
不安を感じ、願望を叫びながら。
□■
ハーゴン神殿第四階層は、アトラスが見境なく暴れ回ったために他の階層にも増して荒れ果てていた。
体の大部分を欠損して絶命したアトラス、何かの爆発が起きたかのような破壊痕、体がちぎれたり潰れたりして床に転がる悪魔神官達の遺体、そして……頭部を潰されて床に倒れ伏すムーンブルク女王。
今ここに、生きて存在するのは二人。一人と一匹と言うべきか？
ムーンブルク女王の遺体を見つけ、顔を臥せるローレシア王。そして彼の後にここに到着したバズズ。
ローレシア王は胸の苦しみに耐えかねて叫ぶ。
「なぜだ!!なぜ殺す!!サマルトリア王はどうした!!」
【ああ、あいつか。あいつは俺が殺したよ。】
バズズは事もなげに答え、ローレシア王の殺気が膨れ上がる。
「なぜだ!!貴様の仲間も死んだ!!なぜ貴様は平然としていられる

!!」
【なぜなぜってうるさい奴だな。つまらないことを聞きやがって。】
「つまらないだと!!何を言っている！何がつまらないんだ!!」
【つまらないに決まっているだろうが!!俺達は貴様らが邪魔で、貴様らは俺達が邪魔でっ!!どちらか片方を殺さないともう片方が生きられないからだろうが!!だから俺達は殺し合いをしてるんだろうが!!違うか!!】
バズズが叫ぶ。
真っ当に答が返って来ると思わなかったローレシア王は、虚を突かれたように硬直する。
「……ああそうだな。そうだった。」
ローレシア王の膨張した殺気が収まり、業物のように鋭くなっていく。
「俺達は互いに自分たちが生きるために殺し合いをしてるんだったな。忘れてたよ。だから俺達の戦いは終わらないんだったな。」
【相手を殺す理由も忘れるとは馬鹿な奴だ。】
向き合うローレシア王とバズズ。
両者は共に走り、神殿の中央部で激突した。
□■
ーーー誘われている。
ローレシア王はそう、直感した。
バズズとローレシア王の先ほどの激突は、傍から見ればローレシア王の一方的な勝利で終わった。
相手の力に押し負けたバズズは、神殿の壁を突き破り階下へと落ちていった。しかしローレシア王の感想は違う。
ーーー攻撃を加えた際の手応えが薄かった。奴は自分から飛んだ。罠に誘い込むつもりだ。
ローレシア王は、敵の手応えの薄さに敵が有利な土俵に持ち込もうとしていることを理解していた。ここで敵を追いかける危険性を理解していた。
しかし、彼の視界の端に入るムーンブルク女王の遺体が、奴を追い

かけて殺せとローレシア王の憎しみの感情を刺激していた。無惨に殺された仲間の復讐をしろ、と。
憎しみと理性はせめぎ合い、結局ローレシア王はここで奴を逃がしたら危険だという理屈をこね上げて、憎しみに身を委ねた。
ローレシア王はバズズを追いかけるために、ハーゴン神殿から飛び降りる。
□■
戦いは、バズズにとって有利に働くロンダルキア山岳地帯大森林にて行われていた。
木々を飛び交い、猿怪は羽を使って襲いかかる。
飛翔して背後から爪を突き立てようとするバズズ、ローレシア王は盾で敵の爪を受け、盾を引いて敵に縦斬りを行う。横にバズズは避け、追撃のローレシア王の袈裟斬りを背後に飛んで樹上に退避する。ローレシア王の斬激は走り、あさっての方向の木々を薙ぎ倒す。
ローレシア王は、飛び上がり樹上のバズズに攻撃を仕掛ける。バズズは素早く木の枝を飛び回り、ローレシア王の背後に回り敵の背中を拳で殴りつける。
「ぐっ。」
雪に落下してローレシア王は転げ回る。
追撃の火炎の息を吹き掛けるバズズ、ローレシア王の火傷痕に触れ、ローレシア王は苦痛を受けるも表情には出さない。バズズが乗っている木を切り倒すローレシア王、バズズは別の木に飛び移り、ローレシア王に爆裂魔法（イオナズン）を放つ。ローレシア王は軽々と避ける。
バズズは考える。
ーーーベリアルが結構な深手を負わせているのが確認できるが……しぶとい奴だ。やはり遠距離が苦手な奴には、距離をとっての攻撃が効果的で確実なはずだ。
バズズがそう思考した瞬間。
「はああっっっ!!」
ローレシア王は必殺の横薙ぎで周囲の木々をことごとく薙ぎ倒す。
バズズは遠方の木々に飛び移り退避する。

ーーー周りの木々を全部薙ぎ倒すとは、またえらく大雑把な戦い方をする。しかし効果があるのも確かだ。
敵は木々を薙ぎ倒しながら、無人の荒野を行くが如く進んで来る。
バズズはため息を吐く。
ーーーさて、どう戦うかな。奴は己の土俵である開けた場所に俺を引きずり込もうとするだろうし、俺は俺で森林地帯で戦いたい。
バズズが思考している間に、ローレシア王は森林を突き進んで攻撃を加えようとする。
【おっと。】
木々を飛び交い、バズズはローレシア王を幻惑する。ローレシア王が敵の移動先を先読みして木を切り倒すも、空中で羽を使い別の木へとバズズは移動先を変更する。戦局は膠着状態に近かった。
バズズは考える。
ーーーこのままこうしていてもらちが明かない。どうする、切り札を仕掛けるか？奴を仕留める算段は着いているし、ベリアルがしっかり仕事をしてくれたおかげで今の奴は傷付いて弱っているはずだ。逃げ帰られて怪我を治されたら逆に俺の方が不利になる。しかし、切り札はもう少し敵を弱らせないと効果が薄いであろうことも事実だ。どれだけ俺が傷付いたとしても、敵の足さえ止められれば援軍がある分俺の勝ちだ!!
バズズは前に出る決意をする。
木々を飛び回りローレシア王の背後からバズズは襲撃する。ローレシア王は敵の軌道を見切り、背後に振り返り剣を斬り落とす。横に避けるバズズ、追撃に回るローレシア王は振り下ろした剣をそのまま横に薙ぐ。バズズは前に出て、剣の根元を右手で掴み、左手で敵の側頭部を殴打しようとする。
「ぐっ!!」
ローレシア王は盾で防ぎ、たたらを踏む。追撃とばかりに至近距離からバズズが火炎の息を吐く。ローレシア王は炎を再び盾で防ぎ、バズズを蹴り飛ばす。
再度走って激突する二人、ローレシア王の斬り落としをバズズは肩

に受け、受けると同時にしなる腕を鞭のように敵の頭部にたたき付ける。雪原を転がりながら立ち上がるローレシア王。
ーーー……浅い。それにあの毛、固い。挙げ句に生半可な攻撃では避けられてしまう。
素早く動くバズズにローレシア王は目測を誤り、バズズの肩への一撃は痛打になっていない。周囲を走るバズズにローレシア王は集中し、殺気を研ぎ澄ます。
「おおおおおっっっ!!!」
ーーー早い!!避けられない!!
バズズは戦慄する。
ローレシア王の必殺の横薙ぎ。バズズは敵の必殺の意思を感じ取り、腕を伸ばす。
【アアアアアッッ!!】
ローレシア王のいなづまのけんをバズズは右手の平で受ける。血飛沫を上げて剣はバズズの右手の下腕部を裂き上腕部を裂き、肩でとまる。
ーーー止められた!?
絶対の自信を持つ必殺を止められたことに、ローレシア王は驚愕する。しかしローレシア王はすでに何回も必殺を使い、ベリアルとの戦いで消耗もしている。必殺の威力が落ちるのは自明の理である。バズズの体毛が鋼鉄以上の強度をほこるという理由もあった。
ローレシア王は全力の必殺を放った直後で僅かに筋肉が硬直している。バズズは至近のローレシア王の露出した顔面に、残った左手で爪を突き立て貫手を放つ。
「ぐうううっっっ。」
間一髪上体を反らして躱すローレシア王の腹部にバズズの蹴りが炸裂する。蹴られたローレシア王は、雪上を転がり体を地にぶつけながら吹き飛ばされる。
「ぐうっ!」
【アアアッッ!!】
バズズは傘にかかって転がるローレシア王の首に左手の爪を突き

立てようとする。ローレシア王は咄嗟にいなづまのけんで敵の左手の薬指と小指を斬り飛ばし、残りの爪を首を捻らせて避ける。避けたローレシア王の顔面にバズズの火炎の息がもろに吹き付けられる。

「ぐあぁぁぁぁっっ!!」

爛れた顔面の火傷痕にもろに火炎を吹き付けられたローレシア王は痛みに悶絶する。バズズは逃げないようにローレシア王の腹部を踏み付け、追撃の火炎魔法（ベギラマ）を放つ。ローレシア王は必死に盾で防ぎ、バズズに剣で反撃するも躱される。

バズズは裂けて役に自身の立たない右手をちぎり落とし、傷口を回復魔法（ベホマ）で塞ぐ。

ーーーまずい！目が……！

幾度となく超高温の熱波を顔面に受けつづけたローレシア王の視力が低下する。高速で迫り来るバズズの左手の突きを受け損ねて、腹部に攻撃を受けて雪の上を転がる。離れた位置から放たれる追撃のバズズのイオナズン、ローレシア王は必死に剣を振り、衝撃波で光球を遠くで爆発させる。

【アアアアアッッ!!】

バズズはローレシア王の近くで幾度となく左手の貫手を放つ。視力にダメージを負ったローレシア王は目が霞み、避けるだけで精一杯で反撃もままならない。

バズズは戦闘でひどい傷を負いながらも、冷静にローレシア王を見ていた。

ーーーここだ!!敵は弱っている!!仕掛け所はここしかない!!

【ウオオオオオオオオン!!】

バズズは咆哮する。ローレシア王は戦いのさなかに突如吠えたバズズに困惑するも、直後意味を理解する。

周囲に展開される悪魔神官とシルバーデビル、ブリザードの群れ。いよいよ敵がこちらを打ち倒すために全力を尽くしてきたことを意味していた。

【バズズ様、ご指示を。】

【周囲にブリザードと悪魔神官を展開して遠距離から魔法で総攻撃

しろ。シルバーデビルは体を張って術者を守れ。一撃離脱を意識しろ。ここにロンダルキアの存亡の全てがかかっている!!死を恐れるな!!」

絶大なカリスマを持つバズズの鼓舞が森林に木霊する。

ローレシア王の周囲にブリザードと悪魔神官達が展開し、総攻撃を仕掛ける。

ーーーザラキ…ザラキ…ザラキ…ザラキ

ーーーイオナズン…イオナズン…イオナズン…イオナズン

「ぐううっ!!」

がたのきている体、未だ焼けるような痛む顔面、それでもローレシア王は立ち上がり、死呪(ザラキ)を必死に避けて、光球(イオナズン)を剣激の衝撃波で斬り落とす。

ーーーイオナズンはともかく死呪(ザラキ)はまずい。くそっ!!

生命力の強いローレシア王は死呪にも多少は抵抗できる。それに聖霊の加護を持つロトの鎧も纏ってはいるが、死呪は当たり所が悪ければ一撃で致命になりうる。

ローレシア王は呪文を避けながらブリザードへ向かおうとするも、単体のシルバーデビルが襲い来る。あっさり斬り落とすが、シルバーデビルに対応した隙にローレシア王を囲む円はメローネの指示を受けて自在に動き、ブリザードに近づけない。

ーーーくそっ!!まずい!!どうする?!被弾を覚悟して指示を出しているデビルロードを先に落とすか?俺の体力が持つのか?まだバズズが控えているのに!!

そこまで考えてローレシア王は自身の最大の失態を悟る。

バズズが視界にいない。考え事をしてる間にバズズが消えている!!さっきまで確実に視界に捉えていたのに?なぜ?

考える余裕も与えずに、再びローレシア王に死呪と光球が殺到する。

ローレシア王は死呪を避け、光球を斬激で斬り落としながら……腹部に悪魔の突き出す残った二本の爪が深々と突き刺さっていることに気付いた。

ーーーこいつっ!!イオナズンを目くらましにして味方の呪文を被弾しながら突っ切って来やがった!!
バズズの痛恨の一撃!!爪はロトの鎧を突き破り、ローレシア王の腹部を貫通する。
バズズは爪でそのままローレシア王を地面に縫い付ける。
「くそおっっ!!」
ローレシア王が剣で反撃しようとするも、再度顔面に炎を吐くバズズに反射で盾で防御をしてしまう。
【今だ!!やれ!!俺ごと確実にこいつを殺せ!!一切の加減をするな!!】
「くそっ!!くそっ!!くそおおぉぉぉぉ!!」
ローレシア王が剣を振り回すもバズズは再び火を吐き、顔面の火傷痕に吹きかかる炎のあまりの痛みにローレシア王は集中できない。
再開される無慈悲な爆撃と死呪の嵐の前に、ついにローレシア王は沈黙した。

■■

ローレシア王の無惨な死を確認し、確実に雪が遺体を覆ったことを確認した後、バズズはハーゴン神殿に戻って玉座に座っていた。
【メローネ、いるか?】
【はっ。】
【指示を聞け。俺が死んだらもうデビルロードはお前しか残っていない。しかし、敵のもっとも悪辣な相手だけは討伐が成功した。ロンダルキアにこもり、当面は専守防衛し、まずは子孫を増やして地力を蓄えることに専念しろ。焦るな。むやみに人間を刺激するな。ゆっくりとロンダルキアを強くしていけ。】
【……はい。】
バズズの言葉は、実質的に遺言である。ローレシア王との戦いで数多の死呪を受けたバズズは生命力が著しく枯渇していた。バズズは死の大地の魔物で死呪に強い抵抗を持つが、被弾した呪文の数があまりにも多過ぎた。
バズズはもう長くないだろう。メローネも他の魔物もそれを理解

している。

【俺は疲れた。少し寝るから休ませてくれ。】

終

???

以前来た場所に私はいた。

切なくも優しい色合い、心が洗われるような建築物、暖かで力強い光。

ーーーああ、▲▲▲▲よ、何と言うことでしょう。あなたが死んでしまうなんて！あなたに今一度の生を授けましょう。さあ、行くのです！▲▲▲▲！私は聖霊▼▼▼。私はいつでもあなたを見守っています。

暖かな光に導かれて、私は目を覚ました。

■■

【バズズ様!!】

【メローネ、お前は仲間を引き連れて逃げろ。】

【嫌です！バズズ様！】

【俺の言うことが聞けんか！さっさとしろ!!】

【あああぁぁ……はい。】

メローネは、俯きながら仲間を率いてハーゴン神殿を去っていく。

死神が、今一度ハーゴン神殿に襲来した。

□■

□■

【貴様、なぜ生きている？】

バズズはハーゴン神殿の壁に背中をあずけながら、ローレシア王に

聞く。
三度目の戦いは、戦いにならなかった。全快のローレシア王、対するは死にかけて片腕のなく策を練る暇も無かったバズズ。まったく勝負にならなかった。バズズは配下を逃がし、孤独にローレシア王と戦い、当然敗れた。もうバズズの体は動かない。
【俺は確実に貴様が死んだのを確認したはずなのだがな？】
「聖霊様に助けられた。」
【なんだって？】
「聖霊様に助けられた。俺が世界を暗黒に陥れる貴様を倒さないといけないと。」
バズズはそれを聞いて目を丸くする。
「聖霊様は俺を祝福して甦らせてくれた。」
【ブッ、バッハッハッハ！】
それを聞いてバズズはおかしいとばかりに笑い出す。
「貴様、何がおかしい？」
【貴様、本当に馬鹿だったんだな。貴様それ騙されてるぞ。】
「なんだと!?」
【貴様は祝福されてるんじゃない。呪われてるんだよ。不死の呪いなんざ、悪魔だって忌み嫌うぜ？】
「そんなわけ!!」
【あるんだよ。考えてみろ。なぜ生き返ったのが貴様だけなんだ？貴様には二人他にも仲間がいたはずだろう？二人は生き返ったか？俺達は貴様の死体の四肢を切断して、燃やしたはずだぞ？そんな状況でなぜ平然として生きていることに疑問を抱かない？貴様は呪われて、騙されて、束縛されているんだ。そしてそんな貴様を思う通りに動かして喜んでいる奴らがいる。滑稽だな。今に見てろよ。貴様はいつか必ずそれを理解することになる。フン、まあどうでもいいことだ。】
ローレシア王は黙り込む。
【覚えておけ。俺は負けて死ぬ。それは摂理で別に構わん。しかし俺の部下達は決して諦めない。貴様らがどれだけ俺の部下達を追い

詰めようとも、俺の部下達は必ずや仲間の屍を乗り越えて貴様らに逆襲することだろう。たとえば俺が一度貴様を殺したように。必ずだ。ハッハッハッハッハッ、ハーッハッハッハッハッ。】

バズズは笑いながら、やがて息絶えた。

□■

人類側……サマルトリア国民七割死傷、ローレシア兵士約三百名行方不明、サマルトリア王死亡、ムーンブルク女王死亡。

ロンダルキア側……全体の魔物のおよそ8割が死亡。首脳部ほぼ全滅。

人類、ロンダルキア軍双方に壊滅的な被害を出して、戦いは収束した。

ローレシア王は以後、ロンダルキアに攻め入ることは無かった。バズズの死の間際の言葉が彼の耳に残っていたのかどうかは、定かではない。

■■

時は流れた。

ロンダルキアに残る廃墟跡地。古くなり忘れ去られたそこには、二柱の神々が奉られている。

人々の知らない魔物の楽園、奉られる一柱は、破壊神シドー。

もう一柱は……ロンダルキアの守護神、バズズ。

終

終　裏

□□

「闘うべきではない！もう奴らに力は残されていない！俺の仲間のサマルトリア王とムーンブルク女王も奴らに倒された。これ以上闘っても、ろくなことにならない。奴らだって闘うほどに学習する！追い詰めるほどに強くなり、なり振りかまわなくなる！サマルトリア王国の一件を忘れたのか！」

「しかし、王よ。」

「あなたが以前奴らを滅ぼすべきだとおっしゃられたはずでは？」

「あなた方英雄は人々のために闘うことこそが本懐なのでは？」

ローレシア王城の会議場で会議は迷走していた。

状況は以前とは違う。以前は敵の姿が見えなかったためローレシア国民はローレシア王が王国を離れることを嫌ったが、今は敵の正体もわかり、敵の王もすでに討ち取った後である。ローレシア王国民の多くは手痛い反撃を受けた今度こそは、真っ先にロンダルキアの残党処理を主張した。

「サマルトリア王国民の歎きとあなたの亡くされた同胞の恨みを晴らすためにあなたは闘うべきです。」

「あなたは人類の最強の矛です。あなたが闘わねば一体誰が闘うと？」

「邪悪なロンダルキアの魔物共を殲滅できるのはあなただけなのです。」

ローレシア王は困惑する。彼の意見はまるで取り入れられない。

たとえ仮にここで彼がロンダルキアの残党を殲滅できたとして、奴らを少しでも取り逃せば再度危険に晒されるのはローレシア国民の彼らであるはずなのに？

すでに一度奴らの反撃を受け、サマルトリア王国は壊滅の憂き目を見たはずなのに？

「あなたは闘わなければいけない！」

「あなたは正義の味方だ！あなたは邪悪な魔物を倒さなければなら

ない！」
「我々の英雄として、あなたは闘うべきだ！」
なぜならばあなたは聖霊様に祝福されているのだから

ーーーお前は祝福されているのではなく、呪われているんだ。
ローレシア王はここで初めて、バズズの言葉の真意を理解した。
彼は強すぎて、彼らはたった三人であらゆる苦難を乗り越えてきた。彼らはたった三人であらゆる敵を葬ってきた。
人々は英雄に依存し、束縛している。
英雄は人々が困難に陥る度に、人々の総意という得体の知れない力、あるいは呪いに突き動かされて戦いの場に駆り出されることとなるのだろう。
英雄は人々の力である。
しかしそれは人々が自身で勝ち取って得た力ではなく、行使に抑制があるものでもなく、人々の己の力を高めるものでもない。ただ無責任に、人々を野次馬にさせるだけのものであった。自分たちを脅かす敵を打倒しろという無責任な外野からの野次。
ローレシア国民はサマルトリア王国の滅亡を教訓にせず、英雄を無条件に自身達を庇護する巨大な力としか認識しない。ロンダルキアの最後の王バズズを討ち取った。そして目の前にあるロンダルキアの残党という恐怖から逃れるためだけに力を行使しようとしている。彼らはロンダルキアの残党を恐れ、サマルトリア王国を教訓にする。あつものに懲りてなますを吹くようにロンダルキア滅亡を高らかに叫ぶ。
しかしそれは偽りの教訓である。本質を履き違えている。
彼らが得た教訓、奴らは生かしておいては危険だから処分しろ。しかし真実は逆で敵を処分しようと行動して追い詰めたから敵はより危険になったのだ。
ーーー不死は悪魔ですら忌み嫌う呪いだ。
ローレシア王が存在する限り、茶番は続く。
人々が一度彼に困難を押し付けうまくいってしまえば、何度でもそ

れが繰り返されることとなるだろう。そして行為はどんどんエスカレートして、えげつなくなっていく。バズズの言葉は案外と的を射ていた。

英雄は何度でも困難の度に戦いの場に駆り出され、束縛され、依存され、いつしか人間同士の戦いの場にも駆り出されることとなるのかもしれない。

ドラクエの語られない幕間では、勇者が立つ戦場が存在しないだけだといいのだが。

□□

ローレシア王は、人々に強制されロンダルキアへと旅立ち、そして音沙汰がなくなった。

彼は終りのない不毛な争いと、いつまでも彼に頼り切る人類を予感し、失踪を選択した。

人々は恐怖し、おののいたが彼らを脅かす勢力が無かったためじきに忘れ去られて行った。ロンダルキアは恐怖の代名詞として語られ、人々が進攻することも無かった。人も獣も一時の安息を愉しむのだ。

音沙汰のないローレシア王のその後を知るものは、いない。

裏　終

もしも編　バズズが呪詛を吐かずに死んだ世界

□□

「王よ、凱旋ご苦労さまでした。」

ローレシア王国の大臣が王城の門扉へと向かい帰還したローレシア王を労う。

「かまわん。これも俺が為すべきことだ。」

「それにしてもデルコンダル王の愚か者めが。時勢が読めずにいつまでもごねるとは。だから滅びることとなるのだ！」

「なに、大した労力ではない。後はペルポイだけか。」

ローレシア王が王国の玉座に座り側近の国政大臣に気怠そうにそうごちる。

ここは、少しだけ違う終結を迎えた世界だった。

□□

バズズはローレシア王と戦い、死んだ。

悪魔（バズズ）は力尽き死に行く際に、ローレシア王に呪詛を遺せなかった。お前は何者かに束縛され呪われている、と。

世界は細やかなカオスで成り立ち、僅かな差異が世界の趨勢を決定付ける。

その結果として、ローレシア王は帰国した後に王国臣民達の恐怖によるロンダルキア制圧の嘆願を受け入れ、ロンダルキアへの進攻を行った。ロンダルキアの魔物達の大半は討ち取られ、少数の手勢は方々のていで逃げ延びた。ローレシア王は容易くロンダルキアを制圧し、彼が先陣を切ることで安全に臣下をロンダルキアへと招き入れ、死の大地の開発に着手した。

難攻不落の天然の要塞と呼ばれていたロンダルキアの洞窟も人が安全に通れるように大規模な工事改革が行われ、魔物はローレシア王に駆り尽くされ、かの洞窟を最も不落たらしめていた無数の落とし穴はことごとく蓋をされた。

目の上のたんこぶであるロンダルキアを我が物にして気を良くしたローレシア王国民は、次の行動を取る。分かりやすく一言で言え

ば、世界統一を目論んだ。一度上手く行って味をしめた者達は、幾度も似たような行為を繰り返す。

曰く、世界で最も力のある英雄、最後に一人残った最大の英雄、ローレシア王の庇護下に入ることが世界中の人々にとって最上の安寧となるという題目の下に。それはローレシア王という超常の力によって安寧を齎されたローレシア王国民にとって、あまりにも当然のことであった。そしてタチが悪いことに、彼らは実際世界の人々のためになるとそう思いこんでいた。三人の英雄達が一人になり、人々の信仰心が一極集中した結果と言えるだろう。

初めはその行為と言動に違和感を感じていたローレシア王も、毎日のように繰り返される臣民の言葉にそんなものかとそう思うようになっていった。そして行動が起こされる。

多くの村や町は英雄の力を恐れローレシアの麾下に入り、少数の国や町はそれを嫌った。

バズズの言うところの呪いは猛威を振るい、初めはそれら反目する国や町に寛容に接していた(そもそも寛容というところもおかしいのではあるが)ローレシア王も次第に臣民が過激になるにつれて過激な言動を取るようになっていく。それというのも、国内でそれらしい大義を大声で掲げるのは決まって過激的な人間であったからである。大多数の良識的な臣民も、あまりに強くまばゆく輝くローレシア王の威光を前にして、過激的な言動を取る人間を強く諌めることをしなかった。

彼らは良識的、穏健派といえば聞こえがよいが長い期間の魔物の進攻に疲れ果てて言論でさえも戦うことを放棄した者達である。生きることは戦い、そう断言したバズズに言わせれば彼らは生きることを放棄した者達ということになるのだろう。そしてローレシア王国は過激派に徐々に引きずられていく。やがて世界の安寧という大儀すらもいつしかは世界制服へと目的が擦り変わり、ローレシア王はそれに気付かない、気付けない。

英雄はどこまでも国民達に依存され、束縛され、洗脳されつづけた。

依存と信頼、束縛と愛情、洗脳と教育、これらはすべて紙一重であ

り、常に表裏一体である。ローレシア王国民に聞けば、彼らは王を信頼し、敬愛し、王国の道と大義を指し示したのだとそう答えるだろう。
そしてローレシア王を対等に諌めることができたはずの彼の二人の仲間達はもう、いない。
ローレシア王は麾下に入ることを嫌がった少数の町に対し、親征と称して直接訪問することによって直々にその威光と武力を見せ付けることで傘下にし、それでもローレシア王に従わなかったデルコンダル王国はついには滅亡した。彼に従わない町は残すところ地下に町を作り、籠城の構えを見せるペルポイのみであった。
恐怖の代名詞として人々に語り継がれてきたロンダルキアは、景勝地としてローレシア王国の貴族の別荘地としての開発が進められる手筈となっていた。

■■

バズズが死に、僅かな手勢を引き連れて命からがらハーゴン神殿から逃走した最後のデビルロード、メローネ。彼はシルバーデビルと悪魔神官を引き連れ、ロンダルキアから出ることの能わないブリザードの群れを囮にして必死にロンダルキアから脱出して逃げ延びた。
彼は泥水をはみ、敵に背を向ける屈辱に絶え、恥も外聞もなくバズズから託された部下達を少しでも未来に繋ぐために命懸けで生きつづけた。まあもとより獣の生自体が命懸けではあるのだが。
彼らは人間から逃げつづけ、見つからないように幾度も土地を移動し、いつしかはロンダルキアを必ずや取り戻すことを誓った。追い詰められた獣の逃避行は長期間続き、彼は誰にも知られずに密かに成長していく。無類の忍耐力を身につけ、そしてあまりにも強大な敵に対抗するためにありとあらゆる能力を研鑽した。もともと上手かった部下を運用する力には磨きがかかり、配下を育てることに長け、敵を討ち滅ぼすために新たな技も身につけた。
そしてその間におよそ十年余りの月日が流れる。
彼の配下のシルバーデビル達がデビルロードと呼ぶに相応しい力を身につけ、自身の後継者と呼ぶに相応しい若者が育ったとき、彼は今一度決意する。

――今こそ我々が愛する大地を取り戻すとき！我々の生と安寧のため、俺が後の者達の礎となる時だ！

□□

「王よ！大変です！」

「騒々しい。一体何事だというのだ？」

「ロンダルキアが襲撃を受けたとの早馬の報告にございます。」

「ふん。」

ローレシア王は少し考える。

新たな敵。彼はデルコンダル進攻も歯ごたえを感じなかった。今度の相手は少しくらい戦えるとよいのだが。

「……敵は何者だ？」

「……それが……その……」

「なんだ？はっきり言え！」

「……報告によりますと敵が何者かは確認できなかったとのことです。」

「どういうことだ？」

訝しみながらもローレシア王は玉座を立つ。久々に腕を振るえるかと彼は愛剣の下へと向かう。

■■

かつて死の大地と謳われたロンダルキア。そこは今や人間の進攻により、所々に積雪を残しながらも美しい自然を背景とした観光の名所となりつつあった。冷え切った大地に暖かな人の営みが築かれつつあり、強大な力を持つ魔物が跋扈していたはずの大地はそのことごとくをローレシア王という死神に駆り尽くされていた。

ロンダルキア襲撃の決行を決意したデビルロードのメローネは配下の悪魔神官達に指示を出す。

【闇夜に紛れて建物を破壊する。燃やせ。しかし人間は虐殺するな。敵をロンダルキアの外に追いやることに専念しろ。爆裂呪文（イオナズン）を放って奴らを脅せ。】

【畏まりました。】

悪魔神官はメローネにどのような意図があるのか聞いたりはしな

い。彼らの王はメローネであり、長期間の逃亡生活で彼らはメローネが信用に足る王であることを認めていた。
　メローネが虐殺を行わずに追い払うことに専念したその理由、それはメローネの脳裏に残る偉大なるバズズの遺言。バズズが最後に己の眷属達を想って遺した言葉は、彼らを破滅の道に進ませなかった。
　敵をむやみに刺激するな。少しずつロンダルキアの勢力を付けていけ。
　かつてのロンダルキアの姿を取り戻すには時間がかかり、むきになって邪魔者の虐殺を行ったとしても敵の巨大な憎しみと抵抗を受けて自力に劣る己達が滅びるだけ。それよりも追い払うことに専念し、まずはロンダルキアが自分たちの土地であったことを奴らに思い起こさせ、認めさせる。そして時間をかけてロンダルキアを強くし、敵との力関係が入れ代わったところで攻勢をかける。
　長期間の逃亡生活で忍耐力を付けたメローネは、長期的な視点で戦う戦略眼を身につけていた。

□□

「ちっ！不愉快だ。」
「なにとぞ、なにとぞお怒りをお沈めくださいませ。」
　ローレシア王の不興を感じ取り、大臣は顔を青くする。
　件のロンダルキアの襲撃者、彼らの襲撃は夜間に行われた。
　襲撃者はローレシアの国家的事業である、ロンダルキアの観光地化の為に建設した建物をことごとく燃やしてきた。闇夜で夜目の効かないローレシア王国民の開拓者達は、夜間に不穏に響く爆発音とつぎつぎに回り行く火勢に泡を喰って命からがらロンダルキアから逃げ出した。
　ローレシア王にはそれだけでも不愉快なのだが、よりによって彼らはローレシア王に恭順しないペルポイの町へと保護された。ローレシア王は今日明日にもペルポイに攻め込もうと考えていたところに水を注されることとなった。
　挙げ句に、襲撃者はロンダルキアへと続く洞窟の入口を爆破する。これにより、ローレシア王国軍の迅速な進攻は不可能になる。

「ロンダルキアにはローレシア城の駐留兵士も派兵したはずだが、奴らは何をしてる？」
「そ、それが……どうやら兵士達も恐れを為して逃げ出したようでして……。」
「使えん奴らだ、無駄飯食らい共めが。そいつらは首にしろ。ふむ、なんならそやつらごとペルポイの町を攻め落とすか？」
「それだけは、それだけはご勘弁ください。彼らもローレシア王国民です！」
「ふん、つまらん。」
そう言うとローレシア王は二本の剣を携える。
かつてのローレシア王の戦いかた、両手にいなづまのけんとロトの盾を持っていた彼の戦いかたは変貌を遂げていた。
もともと彼が盾を使っていたのは、彼に護るべきサマルトリア王とムーンブルク女王という存在がいたからである。しかし、彼らは今はもうおらず、彼が今護るべき対象は不特定多数の臣民達。その場合は、護りを考えるよりも攻めて敵を迅速に殲滅する方が効率がよい。ゆえに護りを考えるよりも一刻も早く敵を討ち滅ぼす戦いかたへと変化していた。
彼はいつしかロトの盾をどこかに置き忘れ、生物であるならば当然必要な感情であるはずの恐怖という感情を忘れていた。そして幸かあるいは不幸か、彼は両手で自在に剣を操れる程の技量に恵まれ、恐怖を失っても勝ち続けられるほどの強靭な生命力に恵まれていた。
ローレシア王はいなづまのけんとひかりのつるぎ、ロトのかぶとを装備する。
「王よ！いずこに向かわれるつもりですか！」
「ロンダルキアへと向かう。襲撃者とやらの歯ごたえを確かめにな。」
「馬鹿な！ロンダルキアへと向かう洞窟は入口が崩落しているはずです！それにお供はいかがなされるのか？」
「俺一人でよい。むしろ足手まといは邪魔だ。洞窟を迂回して山を越える。」

ロンダルキアの洞窟がどれだけ難所であろうとも、ロンダルキアへと向かうときは洞窟を経由せざるを得ない。それは単純に山越えがロンダルキアの洞窟よりもさらなる難行であるからに他ならない。しかし恐怖を失い無尽の生命力を持つローレシア王（怪物）は易々と山越えを選択する。

「そ、そんなわけには……。」

「ふん、貴様らが言ったのであろう？俺は世界の王になるべきだと。王に逆らう愚か者はこの俺が手ずからくびり殺してくれるわ。」

あまりにも非常識。一国の元首が単騎で敵地へと特攻する暴挙。

しかし大臣も、今まで彼のあまりにも高い戦闘力を頼り様々な危険ごとをお願いしてきたためにいまさらそれは危険ですなどと言えない。

■■

【メローネ様、奴が来ます。ロンダルキアの外で見張りを行っていたシルバーデビル達よりご報告です。】

【……やはり乗り越えねばならぬ壁か。忌ま忌ましい。】

悪魔神官が先代のバズズを葬り去った死神、ローレシア王の襲来を告げる。

メローネは敵がロンダルキアの奪還を諦めてくれることに一縷の望みをかけて、ロンダルキアの洞窟の入口を崩落させた。入口を崩落させることによって、ロンダルキアの勢力は見張りに割く労力が増えることになる。ロンダルキアの洞窟が健在であれば、敵は侵入が比較的容易いそこから攻めてくるであろう。しかしそこを落としてしまえば、敵は山側のどこから攻めて来るか分かりづらくなる。

しかし、実際はもう少しだけ複雑にメリットとデメリットが入り混じっている。

落とすメリットは敵がロンダルキア奪還を諦めてくれる僅かな可能性、山越えにより敵の体力が失われる可能性、万一でも過酷な山越えに敵が命を落としてくれる可能性。デメリットはどこから敵が攻めて来るのか分かりづらくなる。

落とさないメリットは見張りが楽になる。デメリットは敵がロン

ダルキアを攻めやすくなる、敵があえて洞窟を経由せず山越えを行い奇襲をしかけて来る。
　メローネは様々な予測を行い、結果として洞窟の入口を落とすことを選択していた。そして、首尾良く奪還が成功し、ロンダルキアを取り戻したと実感できたら後に配下のデビルロード、シルバーデビル達をロンダルキアに呼び寄せる予定を立てていた。
　しかし、やはりというべきか彼らの前に最後にして最大の壁が立ち塞がる。
【……敵は恐ろしく強い。挙げ句に得体の知れぬ超常の力を持っている恐れもある。貴様ら逃げるのであれば今のうちだ。今ならば俺が敵と戦う隙にロンダルキアを逃げ出すことが出来るぞ。俺の配下のシルバーデビル達の背に乗れば逃げ出すこともたやすい。】
　メローネが配下の五人の悪魔神官達に告げる。
【何をいまさらおっしゃるのか？我々も亡きハーゴン様の仇です。何のために我々がメローネ様のご指示のもと研鑽を積んでいたのか？敵にものを見せてくれましょう！】
【ふん。いうものだな。】
　メローネと悪魔神官達は笑い合う。
□■
【それでは戦いののろしを上げる。やれ！】
【イオナズン、イオナズン、イオナズン……イオナズン!!】
　五人の悪魔神官達が頭上に光球（イオナズン）を掲げる。メローネは複数の光球を胎内で生成した地獄の炎で包み込む。
　光球は溶け合い境界を無くし、莫大なエネルギーを内包した巨大な光球が一つ出来上がる。
【喰らえ!!ビッグバン!!】
「ほう。」
　接敵した悪魔の残党共が何を仕出かすかと興味津々で眺めていたローレシア王は、出来上がった巨大な光球を見て面白そうに口元を歪める。
　ここは昼日中のロンダルキアの小高い丘の上。三メートル程度の

高低差、二十メートル程の距離を保って、敵同士が接近した。
巨大な光球はまばゆく輝き、ローレシア王へと向かって飛んでいく。
「当たれば痛そうではあるな。」
ローレシア王は笑いながら右手に持ついなづまのけんから斬激を飛ばす。中空で光球は爆発し、周囲に爆風が吹き荒れる。
「ほう?」
爆発が収まり目の前には巨大な猿怪、周囲に悪魔神官達が展開している。戦端は開かれた。
メローネは自身の爪に、独自にベギラマを進化させた極大火炎魔法(ベギラゴン)を纏わせ、ローレシア王を襲撃する。メローネの火炎斬り。
「ふん。」
ローレシア王は容易く左のひかりのつるぎでメローネの爪を弾く。しかし爪に纏われていた炎がローレシア王へと飛んで来る。
「小癪な!」
ローレシア王は炎を身を翻して躱し返す刀でメローネを切り付けようとして、外野より光球(イオナズン)が飛び、光球にローレシア王が一瞬気を取られた隙にメローネはローレシア王の眼前にすでにいない。ローレシア王は右手のいなづまのけんで悪魔神官の光球を斬激波で斬り飛ばす。ローレシア王の背後に回り弧を描いて襲い来るメローネの右手の爪、それをローレシア王は左手のひかりのつるぎを背中に回すことにより難無く防ぐ。波状に襲い来るメローネの左手の爪。同時に放たれる悪魔神官の光球。
「貴様バズズの縁者か?」
【その通りだ。俺の名はメローネ。俺は貴様と一度相対したことがある。】
「ほう?」
ローレシア王は見もせずに後背に回したひかりのつるぎを左手首で動かし、容易くメローネの左の爪も防ぐ。右手のいなづまのけんを再び動かし、中空で悪魔神官の放った光球を爆発させる。ローレシア王は光球の爆発で起こった爆風に身を乗せ、体を回転させ、メローネ

を正面に捉えて両手の剣を十字に交差させる。
「これでどうだ？」
ローレシア王の尋常ではない両手の二剣での交差斬り。身軽なメローネは羽を使い宙に浮き、剣を両手の爪で受けて背後へと跳躍する。僅かに空く二人の距離。
「やるものだな。しかしいいのか？俺から距離を離して。」
ローレシア王はそう言うと身を翻して周囲に展開する一人の悪魔神官へと向かう。
ローレシア王の背を追うメローネ、速度はメローネの方が僅かに上である。ローレシア王に狙われた悪魔神官は退避し、ローレシア王の背中から襲うメローネの爪を反転したローレシア王がいなづまのけんで防ぐ。続いてメローネから吐き出される火炎の息をローレシア王は左手のひかりのつるぎを回転させて霧散させる。
【ルカナン、ルカナン、ルカナン。】
【スクルト、スクルト、スクルト。】
「ちっ。」
悪魔神官達からローレシア王へと守備低下魔法（ルカナン）が、メローネへと守備上昇魔法（スクルト）が飛んで来る。
ルカナンは実体の無い呪詛の一種であるためにローレシア王は斬り落とせない。
威力の上昇したメローネの爪激と下降したローレシア王の剣激は拮抗し、火花を散らし幾度も渡り合う。
「面倒なことを。」
【喰らえ！】
拮抗から徐々にメローネへと天秤が傾きはじめる。メローネの隼斬り。
もともと二回行動の潜在能力を持っていたメローネは長い雌伏の時を経てそれを開花させ、徐々に手数でローレシア王を押していく。
「舐めるな!!」
敵の手数をうっとうしく思ったローレシア王の二剣での必殺の横薙ぎ。

剣一本で放つそれより単体の威力では劣るものの、重ねる二剣での二激の威力は総じれば以前よりも上である。
【ちっ。】
押していたメローネは背後に細かく跳躍し、必殺の二剣を放つローレシア王の背後より悪魔神官達が隙を見て光球を放つ。
二激により飛ぶ斬激波をメローネは地に伏せて躱し、ローレシア王は背後の光球を横薙ぎを放ったまま回転することにより周囲全体に斬激波を飛ばすことで対応する。悪魔神官達の光球はことごとく宙で破裂し、なおも止まらずに飛び来る斬激波に悪魔神官達は回避行動を取る。
ローレシア王の必殺の僅かな硬直にメローネは火炎の息を吹きかける。
「ふん、いまさらこの程度の攻撃なぞ効かんわ！」
【ならばこちらでどうだ!!】
メローネは火炎の息を止め、甘い息を吐きかける。
「ちっ！厄介な！」
ローレシア王は一瞬自身の認識の遅れに気付き、即座に敵の攻撃が誘眠するものであることに気付く。
硬直の解けたローレシア王は息を避け、側面に回り再びメローネへと襲撃する。
「ふん！」
【はっ!!】
メローネの右の爪とローレシア王のひかりのつるぎが交錯しつばぜり合い、一拍おいて左の爪といなづまのけんがつばぜり合う。
「ぬおお！」
【ぐうっ!!】
ローレシア王の尋常でない膂力に押されてメローネは吹き飛び、ローレシア王は追撃に回るも再び悪魔神官より光球が飛んで来る。
ローレシア王が光球を斬り落とした隙にメローネは敏捷に態勢を立て直す。メローネから少し距離の空いたローレシア王に悪魔神官達の必殺が炸裂する。

【ザラキ、ザラキ、ザラキ!!】
悪魔神官達の死呪(ザラキ)攻勢による援護。
辺りを飛び交うそれらにメローネは己の地獄の炎を混ぜ合わせ、融合させ、巨大な死の炎を作り出す。死炎は悪霊を象どり、津波の如くそれはローレシア王へと襲いかかる。
メローネが悪魔神官達と研鑽しつづけることにより生み出した彼らの必殺。ザラキの進化系呪文。その赤黒い巨大な炎の真価は生物に根源的な死の恐怖を思い起こさせ、背を向けて逃げ出す生命を背後から刈る悪魔の呪文である。
しかしローレシア王は己へと向かうそれを見ても恐怖を感じることはない。彼に恐怖は存在しない。不敵に笑い前進し、強い聖性を持つひかりのつるぎから剣激を放ち悪魔の死炎を霧散させる。
【化け物が!!】
「貴様も似たようなものだろう?」
両者は今一度至近で相対し、両手に極大火炎魔法(ベギラゴン)を纏うメローネとローレシア王の雷光の二剣が幾度となく激突する。
「甘いわ!」
【クソが!!】
幾合も斬り合い、火花を散らしてあたかも演舞を舞うように軽やかに戦う一人と一匹。メローネが敵を素早さで上回ろうとも敵の斬り付けは鋭く強く、一瞬の油断で己の首が飛びかねない綱渡り。
しかし彼もこのために長年の研鑽を積み、戦術を練り、技術を研磨してきた。忸怩たる思いに堪え、若い配下達につらい思いをさせてきたのは何のためなのか?
全ては今日この日、ロンダルキアを奪還して栄華を取り戻し、在りし日のロンダルキアに帰還して自身の眷属達に安寧を齎すため!
彼のその強い思いは彼自身の集中を切らすことを許さない。強い願いは時として生命に力を与える。
彼はいつも以上に自身のパフォーマンスが良いことを自覚していた。しかしそれでもローレシア王にほとんど堪える様子が見られない。

重ねがけのルカナンにより耐久が著しく低下してなおも尋常ではなく固いローレシア王に、メローネは当初の見積もり以上に尋常ではない敵であることを理解する。どんなにうまくやっても長期戦は逃れられない。悪魔神官達もメローネも必死の想いで戦いつづける。

天秤は一見拮抗したまま、戦いは続いていく。

□■

「それで貴様ら、一体どうするつもりだ？」

戦いが拮抗するさなか、ローレシア王が両手の剣を下げ不敵に笑いながら相対するメローネ達に問い掛ける。

【何だと？どういう意味だ？】

「とぼけるな。わかっているだろう？貴様らは強く、驚くべきことに本気では無いとは言えこの俺と互角に戦っている。」

【……何だと？】

本気ではない？

ローレシア王はその問いに答えず少し間をおいて、口元を歪めて問い掛ける。

「貴様は強い。俺とここまで渡り合う相手はもうだいぶ記憶にない。それでこのあとどうするのだ？逃げ出す算段でもついているのか？」

【キサマっっ!!】

ローレシア王の言うことをメローネは理解していた。メローネもローレシア王も戦局を正確に理解していた。

このまま戦えば敗北するのはメローネである。理由はシンプルで、メローネは悪魔神官達の力を借りてようやくローレシア王と互角に戦えている。そうなれば必然、悪魔神官達の魔力が尽きればメローネ達の敗北が待っている。

「逃がさんぞ？俺はそんな温くはない。しかし惜しくもあるな。せっかくだから貴様らにいい提案があるぞ？」

【何だと!?キサマ、何のつもりだ？】

唐突に珍妙なことを言い出したローレシア王にメローネは困惑する。

「俺は強いものが嫌いではない。俺が傅かれているのは俺が誰よりも強いからだ。」

【何を言っている？】

「なに、簡単なことだ。かつてのバズズに比肩するほどに貴様は強く、配下をうまく運用する能力も持っている。新しい技を開発する向上心も気に入った。俺の部下の誰よりも強く、有能だ。俺の部下は貴様に比べれば甚だ見劣りする奴らばかりだ。ちょうどいい。俺の部下になれ。そうすれば貴様に世界の半分を分けてやろう。」

□■

世界は綺麗なもの、汚いもの、善きもの、悪しきもの、美しいもの、醜いもの、ありとあらゆる要素で成り立っている。

常に綺麗なものや善きものが最良だとは限らず、時には悪しき不倶戴天の敵の呪いの言葉が何よりも大切な至言となることすらありうるのだ。

敵が思考を重ね弱点をつき、必死に打倒しようとする。それに脅威を感じるがゆえに彼らは己を客観視して、成長する。強大な敵を得たロンダルキアの残党は著しく成長し、敵うもののいない無双の力を得たローレシア王は己の行為を省みることができない。

バズズの最後の虚勢を張った言葉は、実はローレシア王にとって何よりの金言だったのである。

□■

ロンダルキアは、代々続く由緒正しい悪魔達の治める呪われた土地。そこで覇権を勝ち取った者は、悪魔王と呼べるであろう。

先代の悪魔王バズズは去り……今のロンダルキアの統治者はローレシア王である。

もしも編　終